

## 〈奇妙なもの〉と〈奇妙な者たち〉

——シャーティビー『固守』序論より

「奇妙な者たちに幸せあれ」論考部分の翻訳と解題——

石 郷 岡 宏 記  
田 嶋 望

### 序

本稿は、『固守』(*al-I'tiṣām*)<sup>ムカッティマ</sup>の序論で展開されたシャーティビーの「奇妙な者たちに幸せあれ」に関するハディース解釈を紹介するものである。二部構成の本稿では、第一部で『固守』の序文を訳出し、第二部でその解題を示す。本書はイスラームにおけるビドアとスンナを峻別した全十章から成るが、その序文でシャーティビーは自身の来歴を振り返り「奇妙な者たちに幸せあれ」のハディースについて述懐している。本稿の翻訳部では、その箇所を抜粋・校訂したサリーム・アル＝ヒラーリー編『奇妙なものど奇妙な者たち』第三章「奇妙なものど奇妙な者たちについてのシャーティビー論考」を原註を含め全訳する。解題部では、第一部で披瀝されたシャーティビーの奇妙な者たち論<sup>ツラバ</sup>を讀解し、イブン・タイミーヤおよびイブン・カイイムのグラバー論と比較検討する<sup>1</sup>。

### 凡例

- 一、底本には Salim b. ʿĪd al-Hilālī (ed.), *al-Ghurba wa-l-Ghurabāʾ*, Dammam: Dār al-Hijrah li-l-Nashr wa-l-Tūziʾa, 1989: 83-101 を使用したが、Ibrāhīm b. Mūsā Abū Ishāq al-Shāṭibī, *al-I'tiṣām*, Muḥammad Rashīd Riḍā (ed.), Cairo: al-Hayyah al-Miṣriyah al-ʿĀmah li-l-Kitāb, 2009: 20-29 をも参照し、ヒラーリー版の誤植と思われる箇所はリダー版に従った。また以下の英訳も参照した。Ibrahim Ibn Musa Abu Ishaq al-Shatibi, *Kitab al-I'tisam*, Mohammed Mahdi Al-Sharif (trans.), N.p., n.d; Abou Ishaq Ibrahim Ibn Musa Al-Shatibi, *Kitab Al-I'tisam*. Mohammed Mahdi Al-Sharif (trans.), Beirut: Dar Al-Kotob Al-Ilmiyah, 2012; Usama Hasan, "An Abridged Translation of Imam Al-Shatibi's Introduction to his *Al-I'tisam (Book of Holding Fast)*," 2009.
- 一、原註はアルファベット (a, b, c ...) を付して脚註とし、訳註は通し番号 (1, 2, 3 ...) を振り文末註とした。
- 一、クルアーンからの引用部分については「 」内に太字で表記した。また文中で意味を補った ( ) 及び、文章を補った [ ] 内の補足は訳者によるものである。

## 第一部：翻訳

イマーム・シャーティビーは『<sup>イクトイサーム</sup>固守』で述べている\*。

それでは始めよう。

親愛なるわが友よ、選ばれし精髓よ、序において、本稿の企図を始める前に示しておくべきこと、それはアッラーの預言者（彼にアッラーの平安と祝福あれ）が述べたものである。

「イスラームは奇妙な<sup>ガリフ</sup>ものとして始まった。そしてそれはまた始まりのような奇妙なものに戻るだろう。奇妙な<sup>ズルバ</sup>者たちに幸せあれ」。

ある者が訊いた。「その奇妙な者たちとはどのような者たちなのでしょうか、預言者さま」。

預言者は云った。「それは人々が腐敗したときに正す者たちです」。

他の伝承では、ある者が訊いた。「その奇妙な者たちとはどのような者なのでしょうか、預言者さま」。

預言者は云った。「部族の中で衝突する者たちです」。

これは曖昧なものだが、ほかの伝承によって明らかにされている。

また別の伝承経路ではこう伝わっている。

「イスラームは奇妙なものとして始まった。そして、始まりのような奇妙なものに戻るまで最後の審判はない。人々が腐敗する時代に、奇妙な者たちに幸せあれ<sup>a</sup>」。

また、イブン・ワハブ<sup>2</sup>の伝承によると、預言者は（彼に平安あれ）は以下のように言われた。

「[アッラーの書物が] 棄てられたときにアッラーの書物を固守し、[スンナを] 消し去ったときにスンナを実践する、奇妙な者たちに幸せあれ」。

また、ある伝承にはこうある。

「まことにイスラームは奇妙なものとして始まった。そしてそれはまた始まりのような奇妙なものに戻るだろう。奇妙な者たちに幸せあれ」。

ある者たちが訊いた。「アッラーの預言者さま、[奇妙な者たちは] どのように<sup>ガリフ</sup>奇妙なのでしょうか」。

預言者は云った。「その者は、ある街やある部族で、まったくの<sup>ズルバ</sup>余所者の〔扱われる〕ようなものです」。

\* 底本は欠落が非常に多く不完全であるため、ひとつの写本に依拠して校訂した。本稿の完成と公刊についてアッラーの神佑を請う。

a このハディースにおける真正 (ṣaḥīḥ) から脆弱 (da'if) までの典拠については既に述べた。

また、ある伝承にはこうある。奇妙な者たちについて訊かれ、預言者は云った。「それはわたしのスナを、人々が死なせているときに、生かす者たちのことです」。

これら〔の伝承〕における奇妙さの性質に関する意味の概要は、イスラームの始まりと終わりにおいて目撃および実見によって明らかとなるが、それは至高なるアッラーが、預言者たちが不在の時期そして無知な者たちの無明時代に、真理のなかの何をも知らず、諸真理の裁定において（イスラーム法に基づいて）判断を下さず、むしろ父祖のところにあったものや先祖が善しとしたもの、逸脱した主張、案出された教義、創出された諸学派といったものを信仰していた状態であったためアッラーの預言者（アッラーの祝福と平安あれ）を遣わしたのであるが、彼（アッラーの祝福と平安あれ）が〔福音の〕伝達者かつ〔悪の〕警告者、アッラーの許可によってかれに呼びかける者、そして〔導きの〕光を灯し照らす者として現れたとき、即座に彼らはそれを否認して反発し、〔預言者が〕真としたものを偽であると改変し、彼に向かって——慣習においては彼らと真逆であり、宗旨においては彼らと訣別していたため——全方位で有り得もしないような、さまざまな〔虚偽によって〕彼を誹毀した。

ある時、彼らは〔預言者が〕一度も嘘をついているのを見たことがないような信頼される正直者であったにも拘らず、彼を嘘つきだと唾罵した。

この時、彼らは自分たちが知る限り〔預言者は〕魔術師の類ではなく、それを〔彼が〕自称することもなかったにも拘らず、彼を魔術師だと非難し始めた。

その時、彼らは預言者は理性が完全で悪魔が憑依していることはないと知っていたにも拘らず、取り憑かれている（物狂い）と言った。

預言者が、主の唯一性とかれに並ぶものがないという真理を以て、彼らに崇拜と帰依を呼びかけたとき、彼らは言った。「彼は諸般の神々を一なる神とするのか。それは大変な驚きだ<sup>b</sup>」。

この正しい布教の求めた結果を認め〔ていたため〕、「彼らが船に乗っ〔て嵐に遭って死にかけ〕たときにはアッラーに対してのみ信心して祈った<sup>c</sup>」。

そして預言者が、彼らに最後の審判の日の衝撃を警告したとき、その可能性の徴証を彼らが視たことを否認して、こう言った。「わたしたちが死に、土に還ったあとに〔蘇らされるといふの〕か。それは〔現実とはほど〕遠い復活というものだ<sup>d</sup>」。

b クルアーン 38章 5節。

c クルアーン 29章 65節。 ※訳註：乗船時に嵐に遭って死にかけた際にはアッラーに祈ったが、その後多神崇拜に戻った。

d クルアーン 50章 3節。 ※訳註：預言者のことを狂人だ、魔術師だ、詩人だなどと言っている。

預言者がアッラーの罰を恐れさせたとき、彼らはこう言った。「アッラーよ、もしこれがあなたの御許からの真理であるならば、わたしたちに天から石を降らせるか、痛苦の懲罰を与えてみよ<sup>e</sup>」、〔即ち〕彼らに与えたことが例外なく起こるという真実に反対したのである。

また彼らに奇蹟の章句が下されたとき、迷誤においてさまざまな集団に分裂し、そのなかでも真理と虚偽を扶かつ導かれし人々を、頑くなに受け入れないと妄言を言い回った。

これらはすべて、彼らが自分たちに賛同し、自分たちが信じることを受け入れるように強要していたため、彼らは自分たちに反目し無効だとする敵対勢力の反抗を見て、彼らが臆断していればそれを論難したが、彼らは〔自分たちが正しいという〕証拠を掴めなかったため反対していれば相手の信頼性を損なうことができ、正しい方向性の議論を貶めることができると強く信じており、特に、如何なる裏付けもなしに彼らが知識によって議論に勝とうと尽力する際に、先祖〔の教え〕に盲従すること以上のものは殆ど存在しなかった。

だから至高なるアッラーは、イブラヒーム（彼に平安あれ）の民の論駁についてこう伝えられたのである。「また、わたしを後世まで〔語り継がれる〕真実の言葉〔を伝えた者〕としてください。また、わたしを至福の楽園を継ぐ者〔のひとり〕としてください<sup>f</sup>」。そして彼らは——見てのとおり——先祖への盲従に固執することを求める要望をもたらず〔ことへの〕明白な反論に対立したのである。

至高なるアッラーは言われた。「或いは、われがそれより前に彼らに〔多神崇拜の〕啓典を授けたために彼らはそれを固守しているとでもいうのか。否、彼らは言った。まことにわたしたちが見出したのは、わたしたちの祖先がある〔一つの〕宗派の上であり、わたしたちは彼らの足跡が導く途上にあるということです、と<sup>g</sup>」。こうして彼らは盲従を強いるような答えに戻ったのである。そして至高者は言われた。「〔警告者のひとりの〕彼は言った。たとえ、わたしがあなたがたに、あなたがたが祖先に見出したものよりもよい導きを携えて来たとしてもか<sup>h</sup>」。だが単に否と答え、彼らは覚えていた〔先祖の教えに〕盲従して、問いには応じなかったのである。

そして彼らは使徒（彼にアッラーの祝福と平安あれ）に、彼らのもとにあるものは消え去ると予想されたことを否定した。それは彼らの慣習から離れており、〔預言者が〕彼らの不信仰および逸脱とは異なるものを呈示したので、彼らの作為に

e クルアーン 8 章 32 節.

f クルアーン 26 章 74-75 節.

g クルアーン 43 章 21-22 節.

h クルアーン 43 章 24 節.

おいて預言者<sup>カレ</sup>を政治的な次元に引きずり下ろそうと所望した。そして彼らは一時的であっても、仮の状態であっても、一側面であっても、〔預言者に〕妥協する者たちと合意する者たちに分かれ、それを納得した。その後、合意した者たちは彼らの抛り所の弱さ（wāhiya bināi'him）に立ち、彼（平安あれ）はそれ（政治的駆け引きを）拒み、真理を遵守し、純粋で正しいものを保持していた。そしてアッラーは〔次の啓示を〕下したのである。

「言え、不信仰者たちよ。われはおまえたちが崇拜するものを崇拜しない<sup>3</sup>」——等々。

その後、彼らは彼<sup>ムハンマド</sup>に対して敵対的な戦いを仕掛け、彼らが謀反の矢を放ったため、平和の民<sup>アフル・ル=スイルム</sup><sup>4</sup>全員が彼の敵となった。彼の親戚は戦争において〔彼から〕遠ざかり、アブー・ジャフル<sup>5</sup>及びその他の者たちのように彼に近い男系親族は最も遠い存在となり、彼と密接な〔関係にあった〕女系親族は最も心を固く閉ざした存在となった。果たして、いかなる奇妙<sup>ズルバ</sup>さがこの奇妙<sup>ズルバ</sup>さと等しいと言えようか？

それにも拘らず、アッラーは彼<sup>ムハンマド</sup>を独りにせず、〔彼を害する〕傲慢な者たちが損害を被ることを除いて、彼を害する者が〔彼に〕危害を与えることを許さず、むしろ、信頼において彼を保護し、守護し、導いたのである。その結果、彼が主<sup>リカーブ</sup>の使信を届けるに至ったのだ。

それから、シャリーアが、それを確立し続ける過程において、シャリーアの民とその他の者を峻別し、その真理と〔逸脱者が〕新たに逸脱したものととの間に境界線を引いたが、それは〔シャリーアの〕叡智の驚愕すべき側面であった。また原始的な宗教の定礎において、彼<sup>ムハンマド</sup>はシャリーアの諸裁定と〔自分たちの〕偉人たちを強く結びつけた<sup>6</sup>。そして、アラブにおいて彼らの男系出自は、彼らの父祖イブラーヒーム（彼に平安あれ）にあり、アラブ以外の者は彼らに遣わされた彼らの諸預言者〔の男系出自〕にある。諸預言者の多くの名に言及した後に至高者が言われたように、

「これらの者はアッラーに導かれた者である。それ故、彼らの導きを踏襲せよ<sup>i</sup>」。  
また、こう言われた。

「かれは、宗教のうちヌーフに命じたものを汝らに制定した。そして、われが汝らに啓示したものと、われがイブラヒーム、ムーサー、そしてイーサーに命じたものを。〔即ち〕宗教を遵法し、その裡で分裂してはならない。〔タウヒードは〕多神教徒にとって重大であった<sup>j</sup>」。

i クルアーン6章90節。

j クルアーン42章13節。

そして彼に平安あれが、それ（シャリーアの建立）に向けて呼びかけているときに、彼らはイスラームの宣教時に姿を表した不信仰者たちによる敵対を恐れながらも、一人また一人と身を潜めながら彼のところへ行った。そ〔れに対〕して〔不信仰者たちはムスリムの〕離別行為を見つけたとき、〔それを〕拒否し、立ち上がり、待ち伏せした。

そして保証人（部族の有力者）の許に助けを求めたイスラームの民の一部については、〔保証人は〕見て見ぬ振りをするか、監視における非難を取り除いて、彼を守った。

彼らのうちで危害から逃れた者は、〔敵対者の〕攻撃（al-ghirrah）を怖れたため、またはアッラーの許に移住するため、またはイスラームにおける愛のため〔に逃避したの〕であった。

そして、彼らのなかで罪がなかった者は彼を守ったが、誰もが知っているように彼にとって安心できる避難場所はなく、彼ら〔敵対勢力〕から困難、暴力、苦痛、賊害を受けた。その結果、彼らのうちで過ちを犯すべくした者は過ちを犯し、その行いは〔不信仰者との〕合意に回帰するが故に〔不信仰に〕回帰し、彼らのなかの幾人かの忍耐強く思慮深く留まった者が残留した——至高なるアッラーが一見すると〔不信仰者の棄教しろという言葉に〕合意したようにみえる不信仰の言葉を発することの許可を下すまで<sup>7</sup>。その合意は、不信仰者と〔不信仰の言葉の〕発言者のあいだに成立しているため、その差異は消失し、そこで信仰の秘匿を行った者が合意をしたのである。苦悩〔の状態〕から一息つくために、首を絞められている状態から息をつくために、そして彼の心が信仰によって落ち着くために。

これもまた明らかに奇妙なものである。これは叡智の場所がわからなかったことに他ならない。また彼らの使徒（彼にアッラーの祝福と平安あれ）が彼らにもたらした啓示は、彼らがその上にあったところ（無明時代と不信仰）の反対にあった真理であり、それゆえ何一つとして知らぬ者は彼に敵対したが、知っていたならば、〔預言者の宣教に対する〕合意が成立し、〔宣教に対する〕反対は聞かれなかっただろう。しかし、〔アッラーの〕天命は、創造物に対して、彼らがその上にあつたもの（無明時代と不信仰）を彼らに定めていた。至高なるアッラーは言われている。

「だが彼らは分裂をやめなかった。ただし、汝の主が慈悲をかけ給うた御方は別である<sup>k</sup>」。

それから、イスラームは拡大を続け、また使徒（彼にアッラーの祝福と平安あ

k クルアーン11章118-119節。（ヒラーリー版の原註では117-118節となっているが、正しくは118-119節）

れ)が生きているあいだはその道は正しかったが、彼および教友(彼らにアッラーの満足あれ)の大部分が死没したあとには、彼らの中でスンナからの逸脱が現れ、彼らは逸脱したものに耳を傾けた。それはカダル派<sup>8</sup>の異端あるいは、ハワーリジュ派<sup>9</sup>の異端のようなものであり、預言者の以下に述べたハディースがハワーリジュ派に対して警告したところのものである。

「彼らはイスラームの民を殺め、偶像の民を野放しにし、口先だけでクルアーンを誦むでしょう<sup>l</sup>」。

即ち、アッラーのお力によって、後にイブン・ウマル<sup>10</sup>のハディースが明らかにしているように、彼らはそれを理解せず、むしろ表面的に受け取ったのである。これはすべて教友の時代の末期のことであった<sup>11</sup>。

「ユダヤ教徒たちは71の分派に分裂し、キリスト教徒もそのようになり、わたしの共同体も73の分派に分かれることでしょう<sup>m</sup>」。

また、別のハディースにはこうある。

「あなたがたは、あなたたちの前にあった慣行に全範囲、全方面に渡って追従し、その結果、彼らが蜥蜴の穴に入ったとしても、あなたがたは彼らに追従するだろう」。

わたしたちは訊いた。「預言者さま、〔彼らとは〕ユダヤ教徒とキリスト教徒のことですか(?)」

預言者は云った。「他に誰がいるというのでしょうか？」<sup>n</sup>

これは一番目の事例よりも一般的である。というのも、一番目の事例は学識者たちの多くによると特に異端者たち(ハワーリジュ派)を指しており、そしてこの二番目の事例は離反者たち一般のことである。このことについては以下のハディースが示している。

「もし彼らが蜥蜴の穴に入ったとしたら、あなたがたは彼らに追従するだろう」。だが、個々の〔預言者から〕離反した隣人たちは、他者にそれ(離反)を呼び

l ブハーリー(『ファトフ』13巻416)およびムスリム(『ナワウィー』16巻219)を参照せよ。

m アブー・ダーウード(4596)、ティルミズイー(2640)、イブン・マージャ(2391)、その他を参照せよ。ムハンマド・ブン・アムル、アブー・サラマ、アブー・フライラを経由して預言者に遡ることができる。そしてこの伝承経路は良好であると筆者は考える。

n ブハーリー(『ファトフ』6巻495、13巻300)、ムスリム(『ナワウィー』16巻219)、アフマド(3巻84、89、94)、イブン・アースィムの『スンナ』(74-75)、バガウィーの『スンナ注釈』(14巻392)、イブン・ナスルの『スンナ』(90巻12)を参照せよ。ザイド・ブン・アスラム、アター・ブン・ヤサル、アブー・サイード・フドリーを経由して使徒(彼にアッラーの祝福と平安あれ)が言われた。

編者(ヒラーリー)は以下のように考える。その証人たちは教友の集まり、すなわちアブー・フライラ、イブン・アッバース、アブー・ワーキド・アル＝ライシー、アブドゥッラー・ブン・アムル、その他から成る。すでにそのことについて、編者はハディース伝承経路についての『小勸告』(al-Waṣīya al-Ṣuḡhrā) 32-36頁で言及した。

かけ、他者をそれへと駆り立てる性質を持つ。なぜなら、その〔離反者が自分たちの〕一挙一動における賛同を求めることが人間に元来備わった気質なのである。だから、反対する者は反対し、賛同する者は賛同し、そこから反対者に対する敵意と憎悪が生じるのである。

イスラームはその嚆矢と初期において抵抗力があるどころか、むしろ勝利していたのである。その民は征服者であり、彼らは多数派を成し、故に〔イスラームの民は〕多く、援助者も多かったため〈奇妙さ〉の性質がなかった。彼ら以外——彼らの道を追わない者、もしくは追ったもののその中で異端の説を唱えた者——のところには、その拠点が大きくなる攻撃力はなく、また勝利者たるアッラーの党派がそれ（敵の攻撃力）によって弱まる力はなかった（弱体化し得なかった）。それ故に彼らは結集と調和の道を歩み、そして訣れた者は制圧され、その結果〔彼らは〕結集しようとしても約束された分裂に帰してしまうのである。彼らの力は予見された弱さに落ち着き、〔その訣れた者から〕訣別した〔正しい側の〕者たちは、攻撃力が強く、多数派であり、その本質は合意者に対して賛同の主張を要求するものである。その勝者というものが多数派であることには疑いがなく、逸脱者および異端者は多数派であるスンナの人々に逆らうが、彼らの多くは分派に分かれたのである。

またこれは創造物の中におけるアッラーについてのスンナである。虚偽の人々と比較して真理の人々は僅かなのだから。至高者の言葉にあるように、

「そしてひとびとの大半は、おまえが切望しても、信仰者ではない<sup>o</sup>」。

また至高者は言われている。

「よく感謝する者は僅かである<sup>p</sup>」。

そしてアッラーが彼の使徒（彼にアッラーの祝福と平安あれ）に約束したイスラームの〈奇妙なもの〉への回帰を実行することになるのだが、〈奇妙さ〉は人々の消滅または減少なしには存在しないのであり、これは正しいものが間違いとされ間違いが正しいとされる時、またスンナがビドアとされビドアがスンナとされる時であり、異端者たちに逸脱の言説が収斂することを望んでいるビドアの人々に対して最初に行われるように、スンナの人々に対して叱責と暴力的な扱いが行われるが、アッラーは最後の審判が訪れるまでは〔言葉の〕収斂を拒んだため、分派すべてが——彼らは多数派であるにも拘らず——スンナの人々への反対へと収斂したことは歴史（‘ādah）や聖典（sama’）においてもなかったのである。一方でスンナの人々の集団はアッラーの命令が来るまでは〔みずからの立場を〕

o クルアーン 12章103節.

p クルアーン 34章13節.

固守しなければならないのだが、しかし異端者たちが彼らに頻繁に争いをけしかけ敵意や憎悪を向け、自分たちに合意するよう呼びかけたので、〔スンナの人々は〕夜も昼も問わずに、<sup>ジハード</sup>聖戦および戦闘、そして抵抗と交戦を続けていたのである。このことによってアッラーは彼らへ多大なる報酬を授け、大いなる報償を与えるのである。

いままで述べたことを要約すると、離反者に対して〔スンナへの〕合意を要求するというのは、或る時代にはあり或る時代にはないというものではなく、時代を問わず常にあり (jārin)、故に〔スンナに〕合意した者というのは要求された時もいかなる状況であろうと正しく (‘alā ayi halin kāna)、反対の者というのは攻撃を受ける誤った者で、合意した者というのは称賛される幸福な者であり、離反した者というのは非難に遭い追放され、合意した者は導きの道を進み、離反した者は迷誤の道を彷徨うのである。

この緒言を序に置いたのは次のことを述べるためである。それは、私は——誉れ高きアッラーによって——理性が〔イスラームの〕理解へと開かれ探求が学問の方へと差し向けられて以来、理性の学とシャリーアの学ならびに宗教原論と法学を絶えず考究し、或る学問〔には取り組み〕、別の学問〔には取り組まない〕といったように自己限定することなく、また諸学からある学問分野を排他的に孤立させず、時と場合の要請に応じて自分の基本性質に与えられたところの〔神の〕恩寵がそれ(学問)を与え、それゆえに泳為〔が得意だったため〕に荒波に身を投げ出し、その(学問の)戦場において無謀なものに愚直に邁進していったが、そこで私は〔学問の〕深淵の一部で破滅しかけ、また自分に運命づけられたものへと向かっていた〔ところで〕親しみをもっていた友人たちから手を切られ、発言者の発言と非難者の非難から距離を置き、妨害者の妨害と批判者の批判に背を向けてきたが、その結果、寛大な主および慈悲深き慈愛者は私に対して親切であり、私の計算になかったシャリーアの意味を説明し、至らない自分にアッラーの書物と預言者のスンナというものが導きの道において誰が言おうとその二つを見捨てられない(その二つから離れてはいけない)ということを教えていただき、その二つを除いては考慮の余地はなく、その宗教が既に完全であり、大いなる幸福はすでに置かれたもの(イスラーム)の中にあり、求めるものは〔神が〕定めたものの中にあり、それを除いたものは逸脱、誹謗、嘘、ならびに墮落なのであり、両手でその二つを掴んでいる者は最も堅い握りを掴む者であり<sup>12</sup>、良い二つの言葉を現世でも来世でも手に入れる者であり、それら二つ以外のものは空想、妄想、幻想で、そして、疑いなく〔アッラーの〕禁領地の周りを行き、〔アッラーの〕領域に身を投げてはならないという、正しさについての証明が私になされたのである。「それは我々と人々への、アッラーの恩寵からのものである。しかし

大半の人々は感謝しない<sup>q</sup>。かれが相応しいように、誉れと感謝をアッラーに捧ぐ。

それ故そこから私自身は、アッラーが簡易化した分だけ、その〔知の探求〕道において歩みを強め、行為および信条においては宗教原論から始め、それから宗教原論に基づいた法学<sup>フルーウッディーン</sup>をやり、その際に私はなにがスンナ由来でなにがビドア由来かを明確にし、同様になにが許可由来で何が禁止由来かを明らかにし、宗教および法学の基礎知識に基づいてそれを照合した。それから私自身は、アッラーの預言者（彼にアッラーの祝福と平安あれ）が彼および彼の教友たちの性質について多数派<sup>ハラール</sup>と名付けた集団とともに歩み、諸学者がそれをビドアかつ捏造された行為だと明言したビドアを放棄する。

その間、私は説教や指導など〔の経験〕から大衆の道に入った。そしてその道における誠実さを希求したとき、そこで私はその時代の大衆の中でみずからが奇妙<sup>グルバ</sup>であることを発見した。その道では慣習が支配的であり、新しく余計なものから成る不純物が、元の〔正しい〕スンナに入りこんでいたのである。

前の時代においてそれはビドアではなかったのに、この時代にどうしてそうなるのだろうか（？）それに対する警告が正しい先達たちからすでに多く語られている。

アブ・ル＝ダルダー<sup>13</sup>が次のように言い伝えているように。

「もしアッラーの預言者（彼にアッラーの祝福と平安あれ）があなたがたのもとにやって来たならば、彼と彼の教友たちがやっていたことは、礼拝を除いて何も知らなかったでしょう」。

アル＝アウザーイー<sup>14</sup>はこう言った。「ではもし今日〔預言者がこの時代に〕生きていたとしたら（？）」

イーサー・ビン・ユヌス<sup>15</sup>はこう言った。「ではもしアル＝アウザーイーが今も生きていたとしたら（？）」

またアブ・ル＝ダルダーの妻はこう述べている。アブ・ル＝ダルダーがやって来た。彼は怒っていた。私は聞いた。「なぜ怒っているのですか？」すると彼は答えた。

「本当に、みなで礼拝していることを除いて、私はムハンマドのやっていたことを何ひとつ知らないからです」。

またアナス・ビン・マーリク<sup>16</sup>は述べている。

q クルアーン12章38節。

r アブー・ウマーマ・アル＝バーヒリー（彼にアッラーの満足あれ）のハディースに端を發し、良好な伝承経路である。編者はこれを『ウンマの分離のハディースの理解におけるウンマの忠告』（*Nash' al-Ummah: fi Fahm Ahādīth Iftirāq al-Ummah*）20-21頁において明らかにした。

「私はあなたたちから『アッラーの他に神はなし』という言葉を除いて、私がアッラーの預言者の時代に見知っていたことを見いだせませんでした」。

私たちは云った。「いやいや、ハムザの父よ（？）」

彼は云った。「陽が沈む時にあなたがたは〔アスルの〕礼拝をしていましたが、あれはアッラーの預言者（彼にアッラーの祝福と平安あれ）の礼拝だったとでもいうのですか（？）」

またアナスはこう述べた。

「もしある者が最初期の先達たちに会い、それから今日に遣わされたならば、〔彼はそこに〕イスラームを全く見いだせないでしょう」。

そして彼は頬に手を当て、こう言った。

「この礼拝を除いてです」。

それから彼は言った。「それにも拘らずアッラーに誓って、正しい先達<sup>7</sup>たちに会ったことはないままこの過ちに生きる者は、彼のビドアへと呼びかける逸脱者を見て、そして彼の現世へと呼びかける現世の持ち主を見たため、アッラーはそれから彼を守り、彼の心はその正しい先達たちを渴望しはじめ、彼らの道について尋ねはじめ、彼らの伝承をたどりはじめ、彼らの道を追従し始めたとしたらどうでしょうか。そうすれば〔アッラーは〕多大な報酬を下賜し給う。だから〔あなたがたは〕そのようでありなさい。もしアッラーがお望みになるならば」。

それからマイムーン・ビン・ミフラーン<sup>17</sup>が言った。

「あなたがたのところに、もし先達たちの中から誰かが甦らされたとしても、その者<sup>か</sup>はこのキブラを除いて知らなかったでしょう」。

そしてサフル・ビン・マーリク<sup>18</sup>の父が言った。

「私はその人々のやっていることの中で〔何ひとつ正しいものを〕見いだせませんでした、この礼拝の呼びかけを除いて」。

これと類似した、新しいものが正しいものに入ることを示している伝承はさらにあり、それはすでにわれわれの時代以前にあったのであり、時を継続して現在に至るまで多くなっているのである。

それ故、〔以下の二つの〕見解が〔私の中で〕繰り返された。〔一方は〕人々が慣れ親しんだものから離反する条件においてスンナに従ったため、特に慣習〔に従う〕人々が自分たちの立脚するものがスンナであってそれ以外のものではないと主張したならば、慣習から離れた〔スンナに従った〕人々に何か〔トラブルが〕起こることは避けようがないが、しかしその中に重荷がありその中には報酬がある〔という考え〕。そして〔もう一方は〕私がスンナおよび正しい先達たちから離反する条件において彼らに付き従い、アッラーの御加護を祈りながら、逸脱の生き方に入り、慣習に合わせ、〔慣習の〕反対者ではなく妥協者に数えられる〔と

いう考え]。

そして私はスンナの追従の中での破滅は救済で、私にとって〔離反の〕人々はアッラーに対して何の役にも立たない<sup>19</sup>だろうと決めたのであり、その中で徐々にその事柄の一部を始めたのだが、すると私の身に混乱が訪れ、弾効が連続し、非難の矢弾が差し向けられ、ビドアと迷誤に関係づけられ、無知蒙昧な者たちの水準に引き下げられたのだった。

もし私がこれらの新しいものからの脱出を嘆願したならば、それを見つけただろう。しかし心の狭さ、そして利口な者から離れていることが、私の難易度を上げ、私を窮地に追い込んだのであった。それは表面的には、慣習に合意する不明瞭な〔聖典の〕章句 (al-mutashābihāt) に追従することは、それが最初期の先達たちとは真逆であったとしても、明瞭な章句 (al-wādhāt) に追従するよりふさわしいと暗示する言葉である。

またおそらく彼らは私が向かっているものへの非難において心が縮むものを集めるか、もしくはスンナから逸脱した分派に所属すると、記録される公言をして出ていくのである。それについては審判の日に問われるだろう。

そして一度、私はドゥアーが有用ではなくその中に有益なものがないという言葉の責めに帰された。一部の人間が私のせいにしたように。理由としては私が、礼拝の導師をした際に礼拝の後に集団でドゥアーを続けなかったからである。それがスンナおよび正しい教友たち、学者たちからの離反を犯しているということについては後述する。

また一度、私はラーフィド派 (rafd、シーア派<sup>20</sup>) および教友たち——彼らにアッラーの満足あれ——を嫌う者という責めに帰された。理由としては特に説教において、私が彼らのうち預言者のカリフたちへの言及をしなかったからである。なぜ〔私が言及しなかったか〕というのは、彼らの説教において先達たち〔に関する〕ものは存在せず、尊敬される学者たちの一人たりとも説教の中で先達について言及しなかったからである。

そしてアスバグ<sup>21</sup>は過去のカリフたちに対する説教師のドゥアーについて問われ、以下のように言った。

「それはビドアであり、それを行うことは望ましくなく、その最もいいのは、総じてムスリムにドゥアーすることです」。

彼は以下のように言われた。「そのドゥアーが戦士たちと防人たちのためである場合はどうでしょうか？」

彼は言った。「その必要がある限りは、それに問題はありません。しかし、いつも彼の説教において彼に付随しているものになるでしょう。だから私はそれを嫌うのです」。

またイッズッディーン・イブン・アブドゥッサラーム<sup>22</sup>は、説教におけるカリフたちへのドゥアーは、好ましくないビドアであると明言した。

また一度、指導者たちに立ち向かうことは許されるとの発言が私に結びつけられたが、彼らがそれを結び付けたのは説教時に私が彼らを祈願しなかったということではかないのだが、〔説教時の〕彼らへの祈願は新しいものであり、昔の〔真正な〕ものにはなかったのである。

また一度、私は苦難〔の道〕に固着し〔過ぎで〕宗教において末梢的〔過ぎる〕という咎を負わされたが、その勸責は私が〔他人に〕義務を負わせること (al-taklif) と法の見解〔を問うもの〕に他ならず、〔私は〕守るべき学派<sup>s</sup>を保っており冒していないが、彼らはその一線を越え、質問者を容易にして〔彼らの〕欲望に一致するようなファトワーを示すが、もしそれが〔マーリク〕学派における少数説かそれ以外において異端だとしたら、<sup>アッハムル=イムム</sup>学者の指導者たちはこれとは異なる〔立場にある〕のだが、その問いについては記述が拙著『調停 (al-Muwāfaqāt)』にある<sup>t</sup>。

また一度、私はアッラーに近い者たちに敵対していると帰責され、その理由は私が一部の修道者たち (al-fuqarā') を、スンナに離反した異端者たち (al-mubtadi'in) だとして敵対視したからであるとし、〔一方で〕創造物の導きに属する者として——修道者たちの主張では——立ち上がったため、私は大衆に対し、自分自身をスーフイズムと関連づける者たちおよびそれは彼らと重なり合っていないかったのだという状況を話した。

また一度、私はスンナと一団 (al-jamā'ah、連帯) に背反する者だと帰責されたが、彼らの裡に基づく、追従することが命じられている連帯一団というもの——そしてそれが救済される分派<sup>23</sup>である——がその上にあるものだが、彼らはその集団が使徒 (彼にアッラーの祝福と平安あれ) と教友たちと彼らに善行をもって追従した者たちのところに在ったものだとは知らなかった。これはアッラーの威光とともに後に明らかにされることだろう<sup>u</sup>。

彼らはこれらすべてにおいて私に嘘をつき、あるいは幻想を抱いたのである。すべての状況でアッラーに讃えあれ。

s 狂信的な学派はビドアである。これについては以下を参照せよ。ムハンマド・イード・アッバーサー『学派的狂信のビドア』(Bid'ah al-Ta'ssub al-Madhhabi) 92頁；アル=マウサーミー (著)、サリーム・ヒラーリー (編) 『ムスリムは四大法学派のうち特定の学派に従う義務があるのか』(Hal al-Muslim Murzim bi-Ittibā' Madhhab Mu'ayyin min al-Madhāhib al-'Alb'ah) 91頁。

t これはシャーティビーによる宗教原論の本で、普及している出版物である。

u すでに編者は、その話およびその知恵を拙稿『私が則るハディース及び教友に対する疑念の回避』(Daru' al-Irtiyāb 'an Hadīth mā Ana 'Alayhi wa-l Aṣḥāb) (印刷中) で解説した。

ゆえに私は、彼の有名なイマーム、アブドゥッラフマーン・イブン・バッター・アル＝ハーフィズ<sup>24</sup>と彼の時代の人々とよく似た状況に置かれている。なぜなら彼は〔私の状況と〕同じようにみずからについてこう語っているのだから。

私は自分に近い者たちまたは遠い者たち、私を知る者たちまたは知らぬ者たちと、旅を続けるか定住するかという〔以下の〕みずからの状況に驚いていた。私はマッカや、ホラーサーン、その他の地を見つけ、その土地で出会った者の多くは〔私に〕合意する者か反対する者であり、彼の言うことに従い、彼の言ったことを真実だと認め、それを証言するよう私に呼びかけた。

だがもし私が彼が言うことを認め、それを真実としたなら——この時代の人々がそうしたように——彼は私を合意者と見做すだろう。

またもし私が彼の言動のひとつや、彼の行動のひとつにでも疑問を呈すれば、彼は私を離反者と見做すだろう。

またもし私がそれ〔彼の言動〕についてひとつでも、クルアーンとスンナがそれとは異なって明記されていると言え、彼は私を余所者と見做すだろう。

またもし私に対してタウヒードについてのハディースが朗唱されれば、彼は私を擬人神観主義者（mushabbih）と見做すだろう。

また見神（al-ru'yah）については、彼は私をサーリム派<sup>25</sup>と見做すだろう。

また信仰については、彼は私をムルジア派<sup>26</sup>と見做すだろう。

また行動については、彼は私をカダル派と見做すだろう。

また既知のことについては、彼は私をカッラーム派<sup>27</sup>と見做すだろう。

またアブー・バクルとウマルの美德については、彼は私をナースィブ派（スンナ派<sup>28</sup>）と見做すだろう。

また預言者一族<sup>アフル・ル＝バイト</sup>については、彼は私をラーフィド派（シーア派）と見做すだろう。

また私が聖句またはハディースの註釈について沈黙し、それゆえ、その二つに關するものを（fi-himā）答えず、その二つ〔の字句そのもの〕を用いて（bi-himā）答えたならば<sup>29</sup>、彼は私をザーヒル学派<sup>30</sup>と見做すだろう。

また私がその二つ以外のものを答えたならば、彼は私をバーティン派<sup>31</sup>と見做すだろう。

また私が解釈を論じたならば、彼は私をアシュアリー学派<sup>32</sup>と見做すだろう。

また私がその二つを否定したならば、彼は私をムウタズィラ学派<sup>33</sup>と見做すだろう。

また読誦などのスンナについては、彼は私をシャーフィイー学派と見做すだろう。

またクヌートについては、彼は私をハナフィー学派と見做すだろう<sup>v</sup>。

またクルアーン〔被造物説<sup>34</sup>〕については、彼は私をハンバル学派と見做すだろう。

また私がすべての個々人の〔唱えるところの〕伝承の中で最も正しい言説を立てれば——裁定とハディースにおいて偏向がなかったことから——彼らはこう言うだろう。「われわれの選択に悪態をついている」と。

それから、これら以上に驚いたのは、彼らはアッラーの預言者（彼にアッラーの祝福と平安あれ）の諸ハディースを私に対して誦んでから、彼らのほしいままに上記のような数々のレッテルを私に貼るのである。たとえ私がそのどれかに合意したとしても、それ以外の者は私を敵と見做し、もし私がそれらすべてに妥協すれば、私は祝福された至高のアッラーを憤らせ、そして彼らはアッラーについて何も私の役に立たないため、私はクルアーンとハディースを固守し、かれの他に神はなく寛大で慈悲深いアッラーへ赦しを乞うのである。

これは〔イブン・バッタによる〕完全な物語であり、それは彼（アッラーの嘉みあれ）が大衆に語っていたように、上記のことかその一部で排斥されたことのない有名な学者もしくは著名な碩学を見つけることは僅かだろう。なぜなら、〔スンナからの〕異端（al-hawā）が離反者たちに入り込み、さらにスンナから離脱する理由はそれへの無知と、離反の人々において支配的な追従された異端（al-hawā al-muttaḥā）である。そしてそのような時には、スンナの持ち主はその持ち主ではないと責められ、彼に対して誹謗と言動に対する非難が集められ、その結果、対応するものが〔彼らの主張に〕関連づけられるのである。

崇拜者の長——教友たちに次ぐ——ウワイス・カラニー<sup>35</sup>はこのように言っている。

「まことに正しいものを行い、間違ったものを禁じることは、信徒たちにひとりの友人も残さず、私たちが彼らに善行をすると、彼らは私たちの名誉を罵り、そのために悪人たちからの援助を見つけ、その結果——アッラーに誓って——私を最大限に非難し、アッラーに誓って、私は彼らの中でかれ〔アッラー〕の真理に立つことを止めない」。

本章より、イスラームは始まりのような奇妙なものに戻るだろう。それ〔イスラーム〕の初期の描写においてそれに協力した者は少なく、離反した者は数多いため、スンナの痕跡は消え、その結果ビドアがその首を広げ、群衆に対してビドアの対象を形成したが故に、真正なハディースの証拠は明白なのである。

v クヌート〔の礼拝〕は、ウイトル〔イシャーの礼拝後に行うスンナの奇数回礼拝〕中が望ましい。なぜならばハナフィー学派はウイトルを課しており、しかも義務だからである。一方、ファジュルのクヌート——それはビドアであるが——はシャーフィイー学派が課しているものである。

## 第二部：解題

### 1. シャーティビー——あるアンダルの法学者の肖像

本稿に訳出したのは、シャーティビー『固守』(*al-I'tiṣām*)の序に置かれた文章である。本書は、第一部で訳出した序文に続き、以下の十章から構成されている<sup>36</sup>。

- 第一章 ビドアの定義と意味、そこから言語的に派生したもの
- 第二章 ビドアへの非難およびビドア信奉者の悪い来世
- 第三章 イスラームにおける全てのビドアに対する非難は共通である
- 第四章 立論におけるビドアの人々の〔用いる〕手段
- 第五章 本質的ビドアと付加的ビドアおよびその二つの違いの判断
- 第六章 ビドアの判断およびそれが一面的ではないこと
- 第七章 ビドア化について
- 第八章 ビドアと聖典に特記されていない<sup>マスラハ</sup>公益との差異
- 第九章 ビドアの分派がムスリム集団から分裂した理由
- 第十章 ビドアの人々の道がそこから外れ、それ故クルアーンによる導きから迷った、宗教上の正しい道

この構成からも明らかなように、『固守』は、ビドア (bid'ah、新しいもの) について多角的に検討した論著であるが、ビドアについての議論は別の機会に譲り、この解題では、第一部で訳出した序文を手がかりに、イスラーム思想における〈奇妙なもの〉と〈奇妙な者たち〉について考察してみたい。

第二部では以下、シャーティビーの生涯を簡潔に振り返った後、『固守』序章の要点を整理し議論の要諦を提示する。また底本とした『奇妙なもの』と『奇妙な者たち』所収のイブン・タイミーヤおよびイブン・カイイムの論文との比較を通じて、シャーティビーの「グルバ論」の素描を試みたい。まずは著者シャーティビーについて軽く触れておこう。

アブー・イスハーク・アル＝シャーティビー (Abū Ishāq Ibrāhīm b. Mūsā b. Muḥammad al-Lakhmī al-Shāṭibī al-Gharanāṭī, d. 790/1388) は、14世紀にアンダルスを生きたイスラーム学者である<sup>37</sup>。名に「アル＝ガラナーティー」とあるように、シャーティビーはナスル朝治下アンダルの首都グラナダを拠点とし、1388年に同地で死没したことが記録されているが、その出生は謎に包まれている<sup>38</sup>。「アル＝ラフミー」という部族名から彼はラフム部族 (banū lakhm) の系譜にあり、「シャーティビー」という<sup>シャタバ</sup>帰属からシャーティバ (Shāṭibah) からの

移住者の子孫であると考えられている。なお、このシャーティバという地名は、現在もスペイン東部のバレンシア州にシャティバ（Xàtiva、西Játiva）として残っている。

アンダルス地方は、8世紀にウマイヤ朝に征服された後、後ウマイヤ朝、ムラービト朝、ムワッヒド朝、ナスル朝と15世紀末までイスラーム教徒の支配下に置かれていたものの、イスラーム王朝は、718年から1492年にかけて断続的に組織されたキリスト教勢力による再征服運動<sup>レコンキスタ</sup>の脅威に絶えず曝され続けていた。その聖戦のさなか、シャーティバは征服王ハイメー世によって1242年にキリスト教徒の統治下に回復されている。シャーティビーが生まれたとされる1320年から約80年前のことである。この事実関係は後代の学者たちがシャーティビーがシャーティバ生まれではないと考える有力な論拠となっている<sup>39</sup>。

シャーティビーが生を受けた14世紀のイベリア半島は、イスラーム帝国がキリスト教諸国に征服される最終局面にあった。また、彼が生きた西方イスラーム世界は、歴史的に哲学が優勢でありイスラーム信仰や宗教学は長らく停滞した状況にあった。ちなみにこの西方イスラーム世界の知識人によるギリシア哲学の受容が後に中世ヨーロッパの思想史の発展を準備することになるのだが、イスラーム世界（Islamicate world）のインテレクチュアル・ヒストリーについては本稿の主題から大きく逸れるためここでは措く。いずれにせよ、シャーティビーの時代には西方のイスラーム王朝は退廃しており、信仰や知的伝統は失われ、地政学的にもキリスト教勢力に侵食されていく過程にあったのだが、こうした時代背景は彼のテキストにも滲み出ていると言えよう。

後にマリーク学派の法学者として後世に名を残すことになるシャーティビーは、グラナダの貧しい家の出で、生涯一度もグラナダの外に出ることがなかった。当時のグラナダは北アフリカの学問の中心をなし、イブン・ハーティブ（d. 775/1374）やイブン・ハルドゥーン（d. 808/1406）といった大学者もこの地を舞台にシャーティビーと同時代を生きた。

シャーティビーは同地で高名な学者のもとに学び<sup>40</sup>、若くから学問の才覚を發揮して、当代随一の学者として幅広い分野——クルアーン註解、ハディース学、法学、法学基礎論、アラビア語文法学——を横断する学的営為に身を捧げた。彼には『固守』を含む複数の著作の存在が知られているが、そのうちの数点はすでに失われている<sup>41</sup>。

### 先行研究と本稿の位置づけ

ここで、シャーティビーに関する研究動向を概観しておきたい。本解題の主眼はシャーティビーを通じたグラバー概念の考察にあるため、先行するシャーティ

ビー研究とグラバー論の研究について整理し、本稿の位置づけを明確にしたい<sup>42</sup>。

シャーティビーはアラビア語圏はもとより英語圏でも数多く参照される学者である<sup>43</sup>。中世アンダルスのマーリク学派の法学者として思想史上に位置づけられ、主に法学、<sup>フィクフ</sup> <sup>ウスール・ル=フィクフ</sup> 法学基礎論の分野——特に法の目的と公益の研究で援用されるほか、クルアーン学等の文脈でも言及が見られる。しかし、こうした先行研究に対して日本語圏ではシャーティビーの受容は殆ど進んでいないのが現状である。本邦でシャーティビーを紹介したものには、ワイル・ハッラクや奥田敦の論著があるが<sup>44</sup>、彼の学説に言及した先行研究は上記に加え、浜本一典や飯山陽らによるマカーシド論とマスラハ論についての研究に限られる<sup>45</sup>。なお、マカーシドとマスラハの文脈で参照されるのは基本的には『調停』であり、これに対して『固守』に主眼を置いた先行研究は英語圏でも少なく<sup>46</sup>、グラバー論に焦点を当てた先行研究は殆ど存在しない<sup>47</sup>。

上記に鑑み、本稿は、『固守』序文の訳出（第一部）及びグラバー論の文脈における考察（第二部）を通じて、イスラーム思想におけるグラバー論の更なる理解に貢献することを目的としている。また、現代的な意義として、例えばイスラーム過激派テロリストの思想における「ビドア」を包括的に分析した報告書が英キングス・カレッジの過激化・政治暴力国際研究センター（ICSR）から公開されたが<sup>48</sup>、本稿は、こうしたイスラーム過激派の思想や彼らが立脚する教義を分析する上でも有用であろう。本稿を通じて、中世シリアのハンバル学派のイブン・タイミーヤ及びイブン・カイムとは理論的道具立てと知的潮流の異なる、シャーティビーの〈奇妙なもの〉と〈奇妙な者たち〉に関する解釈が明らかとなる。また、本稿はシャーティビーの著作を初めて邦訳したものであり、「奇妙な者たちに幸せあれ」のハディースについて、現代ジハード主義のタイミーヤ主義に留まらない多元的理解の素材を提供するものである。

## 2. 『固守』——スンナに纏る奇妙な者たち

イスラームにおけるビドアを解き明かした『固守』は、『調停』と並び、シャーティビーの主著のひとつに数えられる。ここで一点補足しておく、シャーティビー最大の業績と目される『調停』は、中世イスラーム法学の達成のひとつであり、本書を通じて彼はシャリーアの目的（maqāṣid）と公益（maṣlaḥah）の理論を打ち立てた。この論著で採用された方法論はスンナ派の最も古い学派であるハナフィー学派とマーリク学派の原則を統合する試みの産物であり、シャリーアの目的と公益理論はイスラーム法に総合的で統一的な視座を提供する理論であると評価されている<sup>49</sup>。一方、イスラーム法学の基礎理論（uṣūl al-fiqh）の発展に寄与した『調停』に対し、『固守』はビドアが蔓延り墮落したイスラーム共同体に

対する警告の書である。

シャーティビーは本書で、ビドアを「シャリーアを模倣し、シャリーアによって目指す〔べき〕ものをビドアを行うことで目指している、イスラームの中で捏造された道<sup>50</sup>」と定義づけてから、その細かな類型を提示し、『調停』の主題である公益 (maṣlaḥah) 理論を導入するなどして、ビドアを多面的に論じている。このことから、『固守』は他の類書と比べて<sup>51</sup>、ビドアの百科全書的な著作であると評価されている<sup>52</sup>。

『固守』という書名について一言触れておくと、本稿で「固守」と訳した「イウティサーム」という語は、アラビア語の語根「' - Ṣ - M」のⅧ型動名詞で「固守すること」「しがみつ়こと」「継ること」「堅持すること」といった意味を持つ。では何に「しがみつ়こと」のか。本書が指示するイウティサームの対象は、聖典クルアーンおよび預言者のスンナである。正しいものが〈奇妙なもの〉として疎外される過誤の時代に、何がスンナで何がビドアかを峻別し、周囲に疎外されようと侮蔑されようと真正なものにしがみつ়こと——シャーティビーは『固守』の序文で自身を奇妙な者になぞらえ、そう宣言しているのである。

## 本論考の解説

次に、第一部の解説を提示したい。この序文は、シャーティビーの晦渋な文体もさることながら、14世紀アンダルスの時代背景やイスラームが置かれた史的状況と不可分であることから、読解には古典特有の困難さが伴う。最終節でシャーティビーとイブン・タイミーヤ、イブン・カイイムの比較分析を行う準備考察として、本論考の議論を9つの論点に分けて要点を整理しておこう。

### (1) イスラームは奇妙なものとして始まった

『固守』の冒頭で、シャーティビーは、預言者ムハンマドの「イスラームは奇妙なものとして始まった。そしてそれはまた始まりのような奇妙なものに戻るだろう。奇妙な者たちに幸せあれ」というハディースを引き、本書を始める。このハディースのなかで預言者は〈奇妙な者たち〉<sup>ḡalībāt</sup>を祝福している。シャーティビーはこのハディースを引用し、イスラームの始まりにおいてはムハンマド自身が最も疎外された〈奇妙な者〉であったが、そこから栄光を手にしたという初期イスラームの史実を詳述する。

預言者の〈奇妙さ〉について、シャーティビーはクルアーンの章句を引きながら以下のように論じている。

ムハンマドが神からの啓示を受けた当時、周囲の人々は先祖信仰をもつ多神教徒であった。この条件下で、預言者はアッラーの唯一性や終末の恐ろしさを人々

に呼びかけていくが、それが人々の信仰と真逆であったため拒絶に遭う。それどころか当の人々は、彼を嘘つきだ、魔術師だなどと誹謗中傷したり、彼は政治的野心から宣教しているのだと難癖をつけて低次元の政治的駆け引きに引きずり込もうと画策したりと、全方位的に敵対した。

このように多神教徒のあいだで燻っていた敵意は、ヒジュラ暦2年に「バドルの戦い」に発展することとなる。しかし、この戦闘で預言者側についた者は殆どおらず、ムハンマドの親族も彼を見捨てた。この孤独な戦いは、預言者ムハンマドが最大の〈奇妙な者〉であったことの証左と言える奇妙な状況であり、シャーティビーは「一体どの奇妙さがこの奇妙さと等しいと言えようか」と強調している点でもある。

バドルの戦いで圧倒的に不利な状況に置かれていたムハンマドの一団は、多勢に無勢であったが、この戦いに勝利しシャリーアの宣揚を続けていく。そのなかで一部の者は宣教に応じて預言者のもとへ行き、敵対関係にある多神教徒からの迫害を耐え忍んでいた。この〈奇妙な〉状況をみたアッラーは、内心では信仰を保ちつつも口先では「私はムスリムではない」と宣言する信仰秘匿を認め、彼らの安全保障を実現した。

## (2) 分派と異端の登場

この後、勢力を拡大したイスラーム共同体は、預言者および彼の教友たちの存命中はその正しさを維持していたが、預言者がイスラームは「73の分派に分かれるだろう」と予言した通り、教友時代末期から分裂が始まった。最初に現れた分裂の徴候は異端審問を行うハワーリジュ派のような一部の極端な派閥の登場であったが、次第にユダヤ教やキリスト教内で起きた分離と同様にイスラーム共同体からの離反者が増えてきた。そして彼らは他の信徒に対しては自分たちへの賛同を要求し、スンナの実践者に対しては反対運動を開始した。しかし、分派は軒並み無力であり、内部分裂を繰り返して徐々に弱体化していった。

この時代は、イスラーム勢力が各地を征服して多数派を形成していく過程であり、イスラーム共同体はもはや迫害される奇妙な者たち＝少数派ではなくなっていった。

## (3) イスラームの〈奇妙なもの〉への回帰

では、イスラームが「始まりのような奇妙なものに戻る」時はいつなのであるうか。シャーティビーによると、それはスンナに追従する人々の母数が減って少数派となり、スンナがビドアとされ、逆にビドアがスンナとされ、本来のスンナの実践者が再び迫害されるようになったときである。即ち、シャーティビーの診

断によると、彼が生きた14世紀には（おそらくはその随分前から）すでに真正イスラーム共同体は〈奇妙なもの〉として少数派と成り果て、スンナにもとる新しく捏造された偽イスラーム共同体が多数派として真正共同体を弾圧していた時点で、始まりのような奇妙なものに戻っていたのである。次節であらためて検討するが、このシャーティビーのハディース解釈はイブン・タイミーヤの解釈と対立するものである。

#### （4）スンナの合意者と離反者

シャーティビーは以上の議論を整理した上で、スンナに合意する者と離反する者の性質および末路について考察を巡らす。スンナに合意する者は、どの時代においても正しく称賛される幸福な者であり、アッラーの導きの道を歩むことができる。一方、スンナから離反する者は、非難を浴びて追放され、迷誤の道を行く運命にある。

#### （5）シャーティビーの砥礪切磋

その後、シャーティビーは自身の半生を振り返りつつ、イスラームが〈奇妙なもの〉に回帰しつつある様子を描写する。学問の才に恵まれたシャーティビーは、法源学や神学といった基礎学問（uṣūl al-dīn）から、法学などの応用学問（furū' al-dīn）まで順に学的研鑽を積んでいった。しかし彼は、そのなかで広大無辺なイスラーム学の深淵に躓き、アンダルスで学術界の主流派を形成していた哲学者からつまはじきにされたりしながらも、一意専心イスラーム学の探究に励んだ。その奮闘のなかで彼が辿り着いた道は、クルアーンとスンナを固守し、学識に基づいてスンナとビドアを峻別し、ビドアを放棄して生きることであった。

#### （6）慣習とビドアの氾濫によるスンナの消滅

この信念に基づいて、シャーティビーは集団礼拝の導師や説教などを通じて大衆の啓蒙を開始する。しかし、彼が直面したのは、宗教と無関係な慣習やビドアが蔓延し、スンナが消えつつある信仰の実態であった。先達たち（salaf）が警告したように、人々はシャハーダの文言や礼拝の作法といった初歩的な事柄を除いて、イスラームについて全くの無知だったのである。こうした環境のなかで、スンナを固守するシャーティビーはまさしく〈奇妙な者〉となっていた。

#### （7）シャーティビーの苦悩と決断

上記の状況下で、シャーティビーの眼前には二つの道があった。ひとつは人々が誤った慣習から離れスンナに従って生きるように教導することであり、もうひ

とつはシャーティビー自身が彼らにに合わせて新しい慣習に妥協し、アッラーの御加護を祈りながらも逸脱の道を生きることである。最終的に、シャーティビーは前者を選び、スンナに追従するなかでたとえ身を滅ぼすことになっても、それはむしろ救済であるのだと信じ、人々を教化することにしたのである。

#### (8) スンナの追従およびビドアの回避に対して異端者が行う誹謗中傷

しかし、現実には残酷である。彼が集団礼拝後のドゥアーをビドアであるとして廃止すれば、シャーティビーは「ドゥアーを無用無益だと難じている」と非難され、説教時に正統カリフに言及しなかった際には「シーア派だ」と譴責され、神秘主義者を批判すれば「アッラーに親しい者の敵対者だ」との謗りを受けた。無論、シャーティビーは、クルアーンとスンナに根拠を見出せない行為言動をビドアであると指摘し、それを行う者を批判したに過ぎない。しかし、彼に正面から反論することができないビドアに与する無学の大衆は、彼を「伝統を無碍にした」「異端者だ」などと罵ること以上の反撃はできなかった。

#### (9) イブン・バッタによる分派と「レッテル貼り」の記述

そのような過誤の人々を糾すシャーティビーの心の支えとなったのは、10世紀イラクの学者イブン・バッタのエピソードである。彼もまたイスラーム学の博覧強記を駆使して人々に指針を示した人物であった。彼には、信仰や行動の面ではカダル派のような極端派と一致する部分があり、正統カリフや預言者一族に対する評価はスンナ派ともシーア派とも受け取ることができ、クルアーンやハディース註釈の方法は字義的 (zāhir) なときもあれば秘教的 (bāṭin) なときもある。神学の論議についてはアシュアリー学派もムウタズィラ学派も参照し、法学の議論については対象に応じてシャーフィイー学派、ハナフィイー学派、ハンバル学派の学説を採用するときもある。

イブン・バッタをはじめとして、クルアーンとスンナに忠実な学者たちは、特定の分派・学派に拘泥しなかった。そのため立場を異にする人々から言動を切り取られ、異端のレッテルを貼られることが幾度となくあった。シャーティビーはこれを正しい者に待ち受けている天命と受け止め、一意攻苦の末に大衆の啓蒙に尽力することを決意したのである。

### 3. タイミーヤ、カイイム、シャーティビー——奇妙な者たちの諸相

最後に、シャーティビーのグルバ論の特徴を、イブン・タイミーヤおよびイブン・カイイムとの比較を通じて析出してみたい。

ただし、比較検討をする前に、比較の前提についてひとつ断っておきたい。翻

訳の底本としたサリーム・ヒラーリー編『奇妙なものと奇妙な者たち』は、イブン・タイミーヤ、イブン・カイイム、シャーティビーの三人が〈奇妙なもの〉について論じたテキストを切り出して一冊の書物に編み直したものであるが、比較の前提となるこの三人の「グルバ論」の出典元には大きな隔りがある。シャーティビーはビドアについて包括的に検討した『固守』の論脈でグルバについて序文で述べ、イブン・カイイムはアンサーリー・ハラウィーの『旅路を往く者』を註釈した『<sup>マダーリジュ・サーリキーン</sup>求道者の階梯』という大著の「グルバ章」でこの命題に取り組み、イブン・タイミーヤは書翰の形式で「奇妙な者たちに幸せあれ」というハディースの解釈を提示している。つまり、イブン・タイミーヤの独立した小論を除いては、複数の章からなる書物の一部として〈奇妙なもの〉に論及しているに過ぎない。したがって、この三つのテキストを以て三人のグルバ論の特徴を精確に比較できるわけではない。イブン・カイイムとシャーティビーのグルバ論においては、『求道者の階梯』や『固守』という書物全体を貫くテーゼの影響から独立したものは有り得ないからである。

以上のような限界と三人のグルバ論が異なる文脈で書かれたという点を踏まえた上で、比較の準備考察としてタイミーヤとカイイムがどのように「奇妙な者たちに幸せあれ」というハディースを論じたかをまずは確認しておこう。

### イブン・タイミーヤのグルバ論——奇妙な者たちの聖戦

イブン・タイミーヤは、〈奇妙な者たち〉のハディースを聖戦の呼びかけに結びつけている。彼は書翰で、(1) 奇妙な者たち、(2) 終末、(3) <sup>ジハード</sup>聖戦、(4) 知識、の四つの論点を扱っているが<sup>53</sup>、この論考の主題は聖戦についての箇所である。その議論の要諦は、以下のように整理することができる。

まず彼は当時の世相をイスラームの奇妙化が進行する過程にあると読み解く。〈奇妙なもの〉として始まったイスラームの「始まり」はムハンマドが宣教を開始したマッカ期を指しているが、イブン・タイミーヤが過ごした14世紀中葉のシリアでは既にモンゴル帝国に共同体の存立が脅かされ、正しい信仰が(始まりのような)奇妙なもの<sup>タガッラバ</sup>と見做される深刻な疎外が進行していた。しかし、如何に困難であろうと正しい信仰を掴み離さない者は「幸せあるところの奇妙な者たち」(tūba li-l-ghurabā')であり、「終わり」、即ち最後の審判の日を前にイスラームは勝利する。イブン・タイミーヤは〈奇妙な者たち〉のハディースをこのように解釈した上で、世界の終わりに勝利に預かる集団としてこのハディースを読み解く。

イスラームの終末に関しては、審判を前に多くの離教者が生じることや来世には僅かな信仰者しか残らないというハディースが遺されているが、イブン・タイミーヤの解釈では、最後の審判を前にしてイスラーム共同体が、奇妙な小集団と

して辱めを受けたままでは終わらない。神は大多数の背教者に代わって、共同体を担い勝利をもたらして広める一団を興す。その神助を受ける集団こそが真正なる〈奇妙な者たち〉を母体とした戦団に他ならないのだが、勝利が約束されているのだから澆季末世にあってもジハードに邁進しなければならない、とイブン・タイミーヤは結ぶ。

この一連の論理の道筋で見逃してはならないのは、ハディースとジハードを結びつける前提となっている終末に向かうイスラームについての歴史観である。イスラームは、ハディースで明証されているように「預言者と教友の最初の世代が最善で、次世代が次善で、続く世代がその次点で、さらにその次世代が(…)」というように、世代を下るごとに共同体の状況が悪化していく下降史観を取る。したがって、原理的には、終末はイスラーム共同体の善良さが底をつく最悪の世代の時に実現するのだが、イブン・タイミーヤは、開始後に拡大したように、終末に際してイスラームが開始時のような〈奇妙なもの〉にまた戻ったとしても、そのまま終わるのではなくまた拡大して終わると解釈する。つまり、彼はイスラーム史を直線的に下降するのではなく、下降基調の中で上昇する局面を多々迎えながら九十九折りに下降していくものと捉えている。そして、この歴史観に立つからこそイブン・タイミーヤは勝利に向けた聖戦を呼びかけることができるのである。

しかし、シャーティビーの歴史認識はこれとは異なる。彼はスンナがビドアとされ、真が偽となる世を「奇妙なものに戻」った状況だと考えるからである。彼はみずからが生きた時代がすでに真の信仰が〈奇妙なもの〉と成り果て、正しい信徒である自身が〈奇妙な者〉に成り下がった澆季之世であると捉えている。彼の歴史観に立脚すると、イスラームはずるずると直線的に下降を続けていき終末を迎えることになる。そこには神助を賜う一団の存在もなければ、ジハードの呼びかけも応答もない。あるのはただ、厳然たる事実として立ちはだかる審判のみである。

### イブン・カイイムのグルバ論——神秘主義者の階梯

このように、イブン・タイミーヤはイスラームの疎外という現状に対し、来たべき終末に向けた聖戦を一直線に結ぶ論を立てる。言わば彼のグルバ論は前方方向に直線的に突き進むような理路を辿るグルバ論である。一方でシャーティビーは、本稿で見てきたように、自分が歩んで来た道を振り返りながら己が過去に受けた仕打ちや伝習の羈絆をひとつずつ取り上げて難じていくグルバ論を展開している。端的に言って神経質で粘着質な、後方にベクトルが向いた理路と言える。しかし他方で、イブン・カイイムのグルバ論は、前後に向いている二人のベクト

ルとは全く異なる。というのも彼は、〈奇妙な者たち〉の〈奇妙さ〉には精神的な縦深性があり、修身によって己の〈奇妙さ〉をより高い位階に昇華することができるという神秘主義を展開しているからだ。彼のグルバ論は、前向きなイブン・タイミーヤとも後向きなシャーティビーとも異なり、精神世界の深淵へと向かう垂直的で下向きなものなのである。

また、イブン・タイミーヤとシャーティビーが基本的にクルアーンを引用しながらアーギュメントを構築するのに対して、イブン・カイイムは〈奇妙な者たち〉に関連するハディースを脆弱な伝承や異文も含めて網羅的に引用して論を形成している。こうした志向性や方法論の違いから、イブン・カイイムのグルバ論は（その典拠が『求道者の階梯』だからでもあるのだが）二人と比較して極めて独自色が強いものとなっている。

### シャーティビーのグルバ論——聖典を固守する奇妙な者たち

ここまで見てきたように、シャーティビーのグルバ論にはイブン・タイミーヤやイブン・カイイムに見られる「聖戦」や「神秘主義」といった側面はない。彼のグルバ論は基本的にはビドア論である。シャーティビーの診断では、イスラームや共同体が〈奇妙なもの〉となったのは、ビドアが氾濫して異端派や分派が人口に膾炙し、真の信仰を実践する者が——預言者が最初期にそうであったように——少数派の〈奇妙な者たち〉として傍流に追いやられたことに起因する。預言者のもとにあった一枚岩の原始共同体から、さまざまな分派に枝分かれしていき、本来の主流が亜流となった。彼のいう誤った多数派は、しかしながらみずからの正統性を盲信しており、曲学阿世の学者を規矩として、正しい少数派を矯正しにかかる。過激な教義を盲目的に信仰する狂信者を排斥するような手つきで。

これが「イスラームは始まりのような奇妙なものに戻るだろう」というハディースが予言した世界観であり、それが14世紀アンダルスで既に成立していた、というのが彼の歴史認識である。この情勢分析はイブン・タイミーヤとも共通しているが、シャーティビーが生きたアンダルスという土地の歴史的、学的伝統を考慮に入れると、彼が感じた疎外は殊更大きかったと言えよう。

しかし、敢えて言うまでもなく、こうした現象自体は決して珍しいものではない。「誰が正しいのか」を巡る議論は何時の時代にも存在するし、現在も正しさを巡る神学論争や友敵の対立はあらゆる領野で延々と続けられている。贋作の汎濫により真作がいつの間にか偽作とされる状況は、洋の東西を問わず宗教においても見られる。

ではシャーティビーが、自分は正しくて周囲の大多数が間違っていると判断できる基準はどこに存在するのだろうか。シャーティビーが自分の正当性を確信す

ることと、現代のイスラーム過激派が自分たちこそが共同体を担う一団だと信じて疑わないことのあいだに、果たして差はあるのだろうか。この困難な問いを突破する鍵として、『固守』では「真正」か「異端」かを判断する準拠点としてスンナとビドアが参照され、シャリーア<sup>マカーシド、マスラハ</sup>の目的と公益の理論が適用される<sup>54</sup>。真正なものは神の言葉と預言者の実践であり、新しく捏造されたものを信じるのは異端である——。この単純明快な方途こそが、シャーティビーのグルバ論を際立たせている最大の特徴である。

### 結びに代えて

本稿は、イブン・タイミーヤ、イブン・カイイムのグラバー論に続いて翻訳された。最後に、この3人のハディース解釈を読み終えた今、改めて次の問いに立ち還りたい。〈奇妙な者たち〉とは一体何者なのか？

それは、「イスラームは奇妙なものとして始まった。そしてそれは始まりのような奇妙なものに戻るだろう。奇妙な者たちに幸せあれ」という預言者ムハンマドのハディースを季布の一諾として夷険一節に信仰を固守する者たちのことである。この者たちは、周囲から変わり者だ、狂信者だと蔑まれながらも、来世に賭けて、「素手で熾を掴むような」痛苦を耐える者たちである。この者たちは、タイミーヤ主義者の思想空間では神命と信じてジハードに繰り出す者たちでもあり、カイイム主義者のもとでは精神の涵養に尽力する神秘主義者たちでもある。この者たちの姿は、イブン・カイイムが諸ハディースから素描したとおりであり<sup>55</sup>、シャーティビーの苦悩する姿とも重なり合うことを本稿を通じて見てきた。シャーティビー、イブン・タイミーヤ、イブン・カイイムが、同一のハディースから異なる解釈を示していることが、一連の研究からわかった<sup>56</sup>。

転じて現代社会に目を向けてみると、いわゆる過激派ジハード主義者は、イブン・タイミーヤが義務を説く聖戦という〈奇妙な者たち〉の動的な一側面を切り出してそこにみずからを重ねあわせて自己正当化を図るが、シャーティビーやイブン・カイイムの論を参照すれば、〈奇妙な者たち〉には周囲の行いや自身の考えをクルアーンやスンナに照らし合わせて内省するという静的な側面も見いだせる<sup>57</sup>。武勇、学識、精神性のいずれか一つが欠けても、預言者が言祝ぐ〈奇妙な者〉足り得ない。このことはイブン・タイミーヤも認めている。故に、過激派ジハード主義者が自分たちこそが奇妙な者たち（ghurabā'、少数派）だと考えることは誤りだろう。本稿で披瀝されたシャーティビーの生涯がその反例を提示している。彼は周囲から〈奇妙な者〉と見做されながらも、武力ではなく、学的な道において尽力する道を選んだのだから。

註

- 1 イブン・タイミーヤおよびイブン・カイイムのグラバー論は、石郷岡（2017 & 2019）および中田（1998）がある。
- 2 イブン・ワハブ（‘Abdullah b. Wahb b. Muslim al-Fihri al-Qurashī, d. 197/813）は、エジプトのマリーク学派の法学者。30の著作を残したと言われているが、現在まで伝わっているのは『集成』（*al-Jāmi'*）の一部のみである。See *Encyclopedia of Islam Online*, s.v. “Ibn Wahb.”
- 3 原註には出典元の記載はないが、引用元はクルアーン109章1-2節。
- 4 アフル・ル＝スィルムは、かつての「預言者の仲間」の意味。
- 5 アブー・ジャフル（Abū Jahl, d.2/624）は「無知の父（≒無知な者）」を意味するあだ名であり、本名は‘Amr b. Hishām b. al-Mughīra al-Makhzūm al-Qurashīという。クライシム族のマフズーム家に属し、アブド・マナーフ家に属していた預言者ムハンマドに対抗意識を持っていた。マディーナに拠った預言者とマッカ軍との最初の戦いであるバドルの戦いでマッカ軍の実質的な指揮者となり、戦死した。以下、訳註における人物・用語解説は、特に注記のない限り、大塚和夫他（編）『岩波イスラーム辞典』（岩波書店、2002年）を参照した。
- 6 「偉人たち」は過去の預言者たちを指す。
- 7 心の中の信仰はゆらぎないが、口では背教の言葉を言ってもいいということ。アラビア語で *mutabāyin ‘alayhi* という。
- 8 カダル派は、ウマイヤ朝末期のダマスカスにおいて、予定説に対し人間の自由意思説を唱えた一派。
- 9 ハワーリジュ派は、イスラーム初期に政治的な理由で興った神学派。思想的な特徴は、「正しい道から逸れたカリフは糾弾されるべき」であり「出自にかかわらず宗教倫理的に問題のない者ならばカリフに選ばれ得る」としたこと、また大罪を犯したものを不信仰者（*kāfir*）と宣告する（*takfir*）ことが挙げられる。
- 10 イブン・ウマル（‘Abdullah b. ‘Umar al-Khaṭṭāb, d. 74-5/693-4）は、高名な預言者の教友。第2代正統カリフ、ウマル・ブン・ハッターブの息子。
- 11 底本のヒラーリー版では「末期」（*akhir*）が抜けているため、ここはリダー版の読みに従った。「末期」の語がないと「彼および教友の大部分が死没したあと（…）」と整合性が取れないからである。
- 12 この表現は、クルアーン2章256節「邪神たちを拒絶しアッラーを信じる者は切れない最も堅い握りを掴んだのである」および31章22節「善行者で、己の顔をアッラーに委ねた者は、最も堅い握りを掴んだのである」に見られる。
- 13 アブ・ル＝ダルダー（‘Uwaymir b. Zayd b. Qays b. ‘Āi’sha b. Ummayah b. Mālik b. ‘Abī b. Ka’b b. al-Khazraj, d. 32/652）は、預言者の教友。ダマスカスにカーディー（裁判官）として派遣された際にモスクでクルアーンを教え、それが後にダマスカス学派の原型となった。See *Encyclopedia of Islam Online*, s.v. “Abu’l-Dardā’.”
- 14 アル＝アウザーイー（Abū ‘Amr ‘Abdullah al-Rahmān b. ‘Amr al-Awzā’i, d. 157/774）は、シリアのアウザーイ生まれで、生前から傑出したハディース学者にして法学者としての名声を博した。
- 15 イーサー・ビン・ユヌス（‘Īsā b. Yūnus, d. 187/803）は、イラクのクーファで活躍したハディース伝承者。See *Mawsū‘ah al-Ḥadīth*, s.v. “‘Īsā bin Yūnus bin ‘Amur bin ‘Abdullah.”
- 16 アナス・ビン・マリーク（Anas b. Mālik, d. 91-93/709-711）は、有名な預言者の教友。ブハーリーとムスリムの両真正集には、アナスが伝えたハディースがそれぞれ200篇ほど収録されている。
- 17 マイムーン・ビン・ミフラーン（Abū Ayyūb Maymūn b. Mihrān, d. 117/735-6）は、イスラーム初期の法学者かつウマイヤ朝の行政官。See *Encyclopedia of Islam*, s.v. “Maymūn

- b. Mihrān.”
- 18 サフル・ビン・マーリク (Sahl b. Malīk, d. 88/707 or 91/710) は、預言者の教友で第四代正統カリフおよびシーア派初代イマームのアリーの盟友。預言者、アリー、預言者の娘でアリーの妻のファーティマから数多くのハディースを伝えた。See *WikiShia*, s.v. “Sahl b. Sa’d al-Sa’idi.”
  - 19 この表現は、クルアーン 3 章 10 節「信仰を拒む者たちは、彼らの財産も子供たちもアッラーに対して何の役にも立たない」からの引用。
  - 20 ラーフイド派とは、「拒否した *rafaḍa*」者のことで、スンナ派から見てシーア派を指す。他方、シーア派の文献では「ラーフィド」は第四代イマーム、ザイヌルアービディーン (‘Alī b. Husayn Zayn al-‘Ābidīn, d. 95/713) から離反した集団を指す。See *WikiShia*, s.v. “Rafidi.”
  - 21 アスバグ (Abū al-Qāsim al-Aṣḡagh b. Nubāta, 生没年不詳) は、第四代カリフ、アリーの最も名高い盟友の一人。預言者の時代からアリーの死 (40/661) までを生き抜いたとされる。See *Encyclopedia of Islam Online*, s.v. “al- Aṣḡagh b. Nubāta.”
  - 22 イズッディーン・イブン・アブドゥッサラーム (‘Izz al-Dīn ‘Abd al-‘Azīz b. ‘Abd al-Salām b. Abū al-Qāsim b. Ḥasan al-Dimashqī, d. 660/1262) は、ダマスカスに生まれのシリアとエジプトで活躍したシャーフィイー学派の法学者。法源として公益 (*maṣlaḥah*) を重視したことで知られる。
  - 23 前述のハディースにおいて「73の分派に分かれ」たもののうち、最終的にアッラーによって救済される一派 (*al-firqah al-nājiyah*) のこと。
  - 24 イブン・バッタ (‘Ubaydullah b. Muḥammad Abū ‘Abdullah al-‘Ukbarī, d. .387/997) は、イラク出身のハンバル学派の神学者・法学者。ビドアをイスラームの質を貶すものとして徹底的に批判し、ビドアの善悪、大小といった議論を斥けた。See *Encyclopedia of Islam Online*, s.v. “Ibn Baṭṭa.”
  - 25 サーリム派 (*salīmī*) は、ムハンマド・イブン・アフマド・イブン・サーリム (d. 297/909) とその息子アフマド (d. 356/967) の教えに基づいた、バスラの神秘主義的神学派。10世紀中葉を代表する地理学者ムカッダシーの記述によると、その当時のサーリム派はマーリク学派に属していたが、創設者はもともとハナフィー学派であり、神学は独自の書物を用いて学んだ。彼らの主な関心は禁欲主義 (*zuhd*) であったという。See *Encyclopedia of Islam Online*, s.v. “Salimiyya.”
  - 26 ムルジア派 (*murjī*) は、イスラーム初期 (7世紀末頃) に起こった政治的・神学的潮流。人間の人間に対する判断を停止して最後の審判においてアッラーに委ねるという教義を主張した。
  - 27 カッラーム派 (*karrāmī*) は、9世紀からモンゴルの侵入までイスラーム世界の東方で栄えた一派。教義は禁欲的・敬虔主義的傾向が強い。分派学の書によると、同派は擬人神観主義者とされ、多くの学派によって批判された。
  - 28 ナースィブ派 (*nāsībī*) とは、第四代カリフのアリーやアフル・ル=バイトに敵意を示す人々のこと。この文脈ではスンナ派を指す。See *WikiShia*, s.v. “Nasibi.”
  - 29 ザーヒル学派は、スンナ派の法学派の一つ。法源としてクルアーンとハディースのみを認め、方法論的には厳格な字義解釈と、タクリード (既存学説への追従) の排斥を唱えた。
  - 30 クルアーンの聖句やハディースを解釈ではなく、(別の) クルアーンの聖句やハディースを用いて逐語的に説明すること。
  - 31 この文脈におけるバーティン派とは、スーフィズムやイスマエイル派 (765年にイマーム派のイマーム、ジャアファル・サーディクの死に際し、その息子のイスマエイルのイマーム位を支持したシーア派の分派) 等、聖典の内面性 (*baṭīn*) を重視する分派全体のことである。
  - 32 アシュアリー学派は、10世紀初頭のアッバース朝イラクでアシュアリー (d. 324/936) によって形成され、今日まで続く神学派。ムウタズィラ学派とハンバル学派との中間の立場をとり、合理的思弁を使って伝承主義を擁護した。

- 33 ムウタズィラ学派は、イスラーム史上最初の体系的神学を形成した神学派。理性的推論を基盤にした緻密で理論的な神学体系を形成したが、あまりにも抽象的な神解釈は一般庶民からの反発を呼び、アシュアリー学派を中心とするスンナ派多数派から激しい反駁を受けた。諸分派については、例えば大淵（2020）を参照されたい。
- 34 クルアーン被造物説は、ムウタズィラ派によって主張されたものであるが、ハンバル学派の祖、アフマド・ブン・ハンバル（d. 241/855）は被造物ではない（ghayr makhluq）として徹底的に否定した。森（2014, 2-5）を参照されたい。
- 35 ウワイズ・カラニー（Uways al-Qaranī, d. 37/657）は、イスラーム最初期の敬虔主義的禁欲家。イエメンにいた彼の清貧と祈祷の生活は預言者の耳にも達したとされ、「われは慈愛の息吹をイエメンより得る」とのハディースが遺されている。
- 36 章立ておよび章題はラシード・リダー版の原典 [Shāṭibi 2009] に準拠し、ムハンマド・シャリーフの英訳 [Shatibi 2012, 4] を参照した。
- 37 シャーティビーの生涯については次の研究を参照されたい。Raysuni 2005, chapter 2; Mas'ud 1975b, 145-161.
- 38 シャーティビーに関する一次史料は、彼の弟子であるマジャーリー（Abū 'Abdullāh al-Majāri, d. 862/1458）が著した『計画』（*Barnāmij al-Majari*）、17世紀マリのイスラーム学者ティンブクティー（Aḥmad Bābā al-Timbukti, d. 1036/1627）による『歓喜の到達』（*Nayl al-Ibtihāj*）ならびに『求むる者の充足』（*Kifāyah al-Muhtāj*）が挙げられる [Raysuni 2005, 73]。二次資料で重要と思われるものに、ムハンマド・アブ・ル＝アジュファーンが校訂したシャーティビー『宣誓と栄唱』（*al-Ifādāt wa-l-Inshā'dāt*）に寄せた序文と、彼が編纂した『シャーティビーのファトワー集成』（*Fatāwā al-Imām al-Shāṭibi*）の解説、ならびに、ムハンマド・マスウードが、1973年にマギル大学に提出した博士論文「シャーティビーのイスラーム法哲学—イスラーム法理論の社会変革への適応性の問題を中心とした〈シャリーアの目的〉の教義とシャーティビーの〈マサラハ〉概念の分析的研究」 [Masud 1973] がある。
- 39 最後のムスリムがシャーティバを離れたのは645/1247年と考えられている [Mas'ud 1975b, 147]。
- 40 シャーティビーは、アラビア語文法学をアンダルスの「<sup>シエイフ・ル＝ヌハート</sup>文法学の権威」アル＝ビーリー（Abū 'Abdullāh Muḥammad al-Birī）および「<sup>ライース・アル＝ウルム・アル＝リサウニーヤ</sup>言語学の指導者」スイブティー（Abu-l-Qāsim al-Sharīf al-Sibtī）に学び、法学についてはマリーン朝のスルターンの拝命でグラナダの裁<sup>カーディー・アル＝クダート</sup>判長を務めたマッカリー（Abū 'Abdullāh al-Maqqarī）および同地のムフティーであったイブン・ルubb（Abū Sa'īd b. Lubb）に師事し、<sup>ウルム・アル＝アクリーヤ</sup>理性の学においてはザウウィー（Abū 'Alī Maṣṣūr al-Zawawī）およびムジュタヒドのティルミザーニー（Abū 'Abdullāh al-Sharīf al-Tilmisānī）の影響を受けた [Mubarak 2015]。
- 41 現存するシャーティビーの著作は以下の通りである。（1）『調停』、（2）『固守』、（3）『宣誓と栄唱』。また（4）『ファトワー集成』もシャーティビーのファトワーを編纂した作品であるためここに加える。紛失した文献は次の通り。（5）『審議の書』（*Kitāb al-Majālis*）、（6）『語源学における同意の徴候』（*Unwān al-Ittifāq fī 'Ilm al-Istiqāq*）、（7）『文法原理』（*Uṣūl al-Nahū*）。（6）と（7）はシャーティビーが存命中にみずから破棄したとされる。また、イブン・マーリクの『長篇詩』（*Sharḥ al-Alfiyah*、千の詩篇）を註釈した作品として知られる（8）『長篇詩註釈』は、サウジアラビアで校訂編集が進められている [Raysuni 2005, 77-80]。マスウードはさらにシャーティビーが医学書を著していたと考えている [Mas'ud 1975b, 156]。
- 42 中世を代表する法思想家の一人として世界的な評価を確立しているシャーティビーであるが、意外にも、彼の法理論が研究対象となるのは20世紀に入ってからのことである。その嚆矢は1884年にチュニスで出版された『調停』（*al-Muwāfaqāt*）であるが、この段階ではシャーティビーの存在は西方のイスラーム学界に留まる限定的なものであった [Moosa 2014, 451]。シャーティビーが注目を集める契機となったのは、エジプトのイスラーム改

革運動の指導者ムハンマド・アブドゥフである。チュニスでシャーティビーの書物と邂逅したアブドゥフは、その斬新な方法論に感銘を受け、『調停』の写本をカイロに持ち帰った [Ibid.]。その後、『調停』は、アブドゥフの弟子アブドゥッラー・ダラズの編集を経て出版され、『固守』は1913年にもうひとりの弟子ラシード・リダーの手による校訂・編集を経て上梓され、ビドアを糾弾するリダーによって『マナール』誌で紹介された [Mas'ud 1975a, 68f.]。

- 43 シャーティビーの先行研究については、例えば、マスウードのサーベイ論文 [Mas'ud 1975a, 67-73] を参照されたい。
- 44 ハッラーク 2010; 奥田 2012, 244-250.
- 45 浜本 2010, 2017, 2018; 飯山 2003, 2007; 奥田 2002.
- 46 基本的には、シャーティビーは法学基礎論、あるいはマスラハやマカーサイドについての研究で引用される。本稿の問題関心に近いものとして、たとえば、現代の法理論におけるマスラハについて論じたオプウイスの研究 [Opwis 2005] がある。また、『固守』で提示された諸概念を概観した研究にアブドゥルアズィーズの研究 [Abdul Aziz et al. 2018]、ビドア論の中で『固守』に言及したものにアブドゥッラーの研究 [Abd-Allah 2006] が挙げられる。現代社会論の文脈では、「良いビドア (bid'ah ḥasanah) は存在するか」という現代マレー・ムスリム社会の論争において、シャーティビーとシャーフィイーのビドア論を統合して応答したアブドゥルカーデイルの研究 [Abdul Kadir et al. 2020] がある。
- 47 管見の限り日本語のみならず英語圏でもシャーティビーのグラバー論に焦点を当てた先行研究は見いだせない。なお、グラバー論についての数少ない先行研究に、近年研究が進むジハード文化 (cf. Hegghammer eds. 2017) におけるナシード研究の文脈で「ナシード・グラバー」(註57を参照) を分析したサイードの研究 [Said 2016, 184-190] や、この概念がイベリア半島の改宗キリスト教徒にどのように受容されていたかを論じた押尾高志の研究 [押尾 2011] がある。
- 48 Winter et al. 2021.
- 49 Tawfiq 2015.
- 50 Shāṭibi 2009, 36.
- 51 例えば、ハディース編纂で有名なナワウィーの師であるアブー・シャーマ・アル＝マクディスイーが著した『新奇と新規を否定する理由』(*al-Bā'ith 'alā Inkār al-Bida' wa-l-Ḥawādith*) がある。なお、アブー・シャーマはシャーティビーの註釈書『意味の呈示』(*Ibrāz al-Ma'āni min Ḥirz al-Amāni*) を著したことでも有名。
- 52 Sharif 2012, 4.
- 53 この点については、拙稿 [石郷岡 2017, 190f] を参照されたい。
- 54 神の啓示と預言者の慣行からシャリーアに普遍的な要素を明らかにし、そこから法規範を導出すること——その諸要素がマスラハであり、その保持がマカーサイドである。浜本 2017, 74. を参照されたい。
- 55 石郷岡 2019, 209-212.
- 56 石郷岡 2017, 189ff; 石郷岡 2019, 209-213.
- 57 無論のこと、暴力を加えるジハード主義者のみならず、国家等による暴力を受けるイスラーム主義者も〈奇妙な者たち〉にみずからを投影する。有名なエピソードに、イスラミック・ジハード (al-Jihād al-Islāmī al-Miṣrī) の構成員がエジプトの有力政治家リファアト・アル＝マハジューブを暗殺した罪に問われた訴訟時の逸話がある。1993年5月15日、被告人に死刑判決が下った際、死刑囚の一人が檻の中で「グラバー」というナシードを歌った。この時の映像は残っており、動画共有サイトでは今でも視聴されている。なお、「ナシード・アル＝グラバー」は歌い継がれており、現代のジハード主義組織の構成員が歌う映像なども多い。See for example, KsaAmbassador, “Shabāb Ḥakam ‘alyhi wa bi-l-I'dām wa Aḥdahum in Shad fa-Qāma al-Muḥāmi Yubki,” February 27, 2011, YouTube video, 5: 29, [https://www.youtube.com/watch?v=PqfIavOUzVk&feature=youtu.be&ab\\_](https://www.youtube.com/watch?v=PqfIavOUzVk&feature=youtu.be&ab_)

channel=KsaAmbassador (2020年12月2日アクセス) なお、このナシードはサイド・クトップが作詞したと広く信じられているが、ベフナム・サイドとバーナード・ハイカルはこれを真偽不明としている [Said 2016, 185]。

## 謝辞

本稿の翻訳において、中田考氏に多大な助言を賜った。ここに記して謝意を表したい。言うまでもなく、訳文中に残された誤りは、筆者の責任に帰するものである。

## 参考文献

〈翻訳原典・既訳〉

- al-Hilālī, Salīm b. ʿĪd (ed.). *al-Ghurba wa-l-Ghurabāʾ*. Dammam: Dār al-Hijrah li-l-Nashr wa-l-Tūziʾa, 1989.
- al-Shātibī, Ibrahim b. Mūsā Abū Ishāq. *al-Iʿtishām*. Muḥammad Rashid Riḍā (ed.). Cairo: al-Hayyah al-Miṣriyah al-ʿĀmah li-l-Kitāb, 2009.
- al-Shatibi, Ibrahim Ibn Musa Abu Ishaq. *Kitab al-Iʿtisam*. Bd. I & II. Mohammed Mahdi Al-Sharif (trans.). N.p., n.d.
- al-Shatibi, Abou Ishaq Ibrahim Ibn Musa. *Kitab Al-Iʿtisam*. Mohammed Mahdi Al-Sharif (trans.). Beirut: Dar Al-Kotob Al-Ilmiyah, 2012.
- Hasan, Usama. “An Abridged Translation of Imam Al-Shatibi’s Introduction to his Al-I ʿtisam (Book of Holding Fast).” Unity (Blog). June 7, 2009. <https://unity1.files.wordpress.com/2009/06/imam-shatibi-introduction-to-the-book-of-holding-fast-to-the-way-of-the-prophet.pdf> (2020年9月28日アクセス)

〈外国語文献〉

- ʿAbbāsī, Muḥammad ʿĪd. *Bidʿah al-Taʿṣub al-Madhhabī*. Amman: al-Maktabah al-Islamiyah, n.d.
- Abd-Allah, Umar Faruq. “Innovation and Creativity in Islam.” The Nawawi Foundation, 2006. <https://static1.squarespace.com/static/54eb86afe4b0b896afa4080a/t/5a12783c24a694409fbc98e1/1511159869736/Article4.pdf> (2020年11月30日アクセス)
- Abdul Aziz, Azwira. Amnudin Basir, Azizi Umar, Staydatun Nazirah Abu Zahrin, Hazman Hassan. “The Concept of Steadfast (Al-Iʿtisam) to The Qurʾan and The Sunnah: The Foundation of Islamic Teaching for Humanizing Mankind.” *Jurnal Pengajian Umum Asia Tenggara*.19 (2018): 56-66.
- Abdul Kadir, Firdaus Khairi. Hailan Salamun, Asyraf Hj Ab. Rahman, Fakhratu Naimah Muhad. “Concept of Taqribraʿyai (Bridging Two Views) in Bidʿah Polemic Within the Malay Muslim Society.” *Humanities & Social Sciences Reviews*. 8/2 (2020): 564-568.
- Hegghammer, Thomas (eds.). *Jihadi Culture: The Art and Social Practices of Militant Islamists*. Cambridge: Cambridge University Press, 2017.
- al-Hilālī, Salīm b. ʿĪd. *Nashḥ al-Ummah fī Fahm Aḥādīth Iftirāq al-Ummah*. n.p. Maṭbaʿah al-Ḍaḥā li-l-Tarjamah wa-l-Nashr wa-l-Tauzī, 1988.
- . *Daruʾ al-Irtiyābʾan Hadīth mā AnaʾAlayhi wa-l Aṣḥāb*. Cairo: Dār al-Tawḥīd wa-l-Sunnah, 2005.
- al-Maqdisī, Shihāb al-Dīn Abū Shāmah. *Al-Bāʾith ʿalā ʾInkār al-Bidaʾ wa-l-Ḥawādith*. 2nd ed. Beirut: Dār al-Dhakhāʾir, 2017.
- al-Maʾuṣūmī, Muḥammad Sulṭān. *Hal al-Muslim Murzim bi-Ittibāʾ Madhhab Muʾayyin min al-Madhāhib al-Aḥbāʾ?* Amman: al-Maktabah al-Islamiyah, 1984.

- al-Mubarak, Tawfique. "Imam Abu Ishaq al-Shatibi: The Master Architect of Maqasid." *International Institute of Advanced Islamic Studies Malaysia*. January 23, 2015. [https://iais.org.my/attach/Imam\\_al-Shatibi.pdf](https://iais.org.my/attach/Imam_al-Shatibi.pdf)
- al-Majāri, Abū 'Abdullāh Muḥammad. *Barnāmiḡ al-Majāri*. Beirut: Dār al-Gharb al-Islāmi, 1982.
- Masud, Muhammad Khalid. "Shātibī's Philosophy of Islamic Law : An Analytical Study of Shātibī's Concept of Maslaha in Relation to His Doctrine of Maqāsīd al-Sharī'ah with Particular Reference to the Problem of the Adaptability of Islamic Legal Theory to Social Change." PhD dissertation, McGill University, 1973.
- . "Recent Studies of Shātibī's al-Muwāfaqāt," *Islamic Studies*, 14/1 (1975a): 65-75.
- . "Abū Ishāq Shātibī: His Life and Works." *Islamic Studies*. 14/2 (1975b): 145-161.
- Moosa, Ebrahim. "On Reading Shaṭībī in Rabat and Tunis." *The Muslim World*, 104 (2014): 451-464.
- Opwis, Felicitas. "Maṣlaḡa in Contemporary Islamic Legal Theory." *Islamic Law and Society*. 12/2 (2005): 182-223.
- Said, Behnam T. *Hymnen des Jihads: Nachids im Kontext Jihadischer Mobilisierung*. Würzburg: Ergon-Verlag, 2016.
- al-Shātibī, Ibrahim b. Mūsā. *al-Ifādāt wa-l-Inshādāt*. Muḥammad Abū al-Ajfān (ed.). Beirut: Muwassasah al-Risālah, 1983.
- . *Fatāwā al-Imām al-Shātibī*. Muḥammad Abū al-Ajfān (ed.). Riyad: Maktabah al-'Ubaikān, 2001.
- Shihāb al-Dīn Abū Muḥammad'Abd al-Raḡman b. Ismā'il b. Ibrahim (Abū Shāmah). *al-Bā'ith 'alā Inkār al-Bida' wa-l-Ḥawādith*. Makkah: Matba'ah al-Nahḡah al-Ḥadīthah, 1981.
- . *Ibrāz al-Ma'ānī min Ḥīrz al-Amānī: fī al-Qirā'āt al-Sabu'*. Beirut: Dār al-Kutub al-'Ilmiyah, 2013.
- al-Timbuktī, Aḡmad Bābā b. Aḡmad b. al-Faqīh al-Hāḡ Aḡmad b. 'Umar b. Muḥammad al-Tikrūrī. *Nayl al-Ibtihāḡ bi-Taṭrīz al-Dibāḡ*. Ṭarāblus: Dār al-Kātib, 2000.
- . *Kifāyah al-Muḡtāḡ li-Ma'rifah min laysa fī Dibāḡ*. al-Maghrib: Matba'ah Faḡālah, 2000.
- Winter, Charlie. Shiraz Maher, and Aymenn Jawad al-Tamimi. "Understanding Salafi-Jihadi Attitudes Towards Innovation." ICSR. 2021.

〈辞典項目・その他〉

- Encyclopedia of Islam*. s.v. "Ibn Wahb." by J. David-Weill. [https://referenceworks.brillonline.com/entries/encyclopaedia-of-islam-2/ibn-wahb-SIM\\_3403?s.num=0&s.f.s2\\_parent=s.f.book.encyclopaedia-of-islam-2&s.q=Ibn+Wahb](https://referenceworks.brillonline.com/entries/encyclopaedia-of-islam-2/ibn-wahb-SIM_3403?s.num=0&s.f.s2_parent=s.f.book.encyclopaedia-of-islam-2&s.q=Ibn+Wahb) (2020年9月8日アクセス)
- . s.v. "Maymūn b. Mihrān." by Fred M. Donner. [https://referenceworks.brillonline.com/entries/encyclopaedia-of-islam-2/maymun-b-mihran-SIM\\_5074?s.num=652&s.start=640](https://referenceworks.brillonline.com/entries/encyclopaedia-of-islam-2/maymun-b-mihran-SIM_5074?s.num=652&s.start=640) (2020年9月8日アクセス)
- . s.v. "Abu 'l-Dardā." by Arthur Jeffery. [https://referenceworks.brillonline.com/entries/encyclopaedia-of-islam-2/abu-l-darda-SIM\\_0171?s.num=353&s.rows=50&s.start=350](https://referenceworks.brillonline.com/entries/encyclopaedia-of-islam-2/abu-l-darda-SIM_0171?s.num=353&s.rows=50&s.start=350) (2020年9月8日アクセス)
- . s.v. "Ibn Baṭṭa, 'Ubayd Allāh b. Muḥammad Abū 'Abd Allāh al-'Ukbari." by Henri Laoust. [https://referenceworks.brillonline.com/entries/encyclopaedia-of-islam-2/ibn-batta-ubayd-allah-b-muhammad-abu-abd-allah-al-ukbari-SIM\\_3112](https://referenceworks.brillonline.com/entries/encyclopaedia-of-islam-2/ibn-batta-ubayd-allah-b-muhammad-abu-abd-allah-al-ukbari-SIM_3112) (2020年9月8日アクセス)
- . s.v. "Salimiyya." by Massignon, Louis and Bernd Radtke. [https://referenceworks.brillonline.com/entries/encyclopaedia-of-islam-2/salimiyya-SIM\\_6552?s.num=253&s.start=240](https://referenceworks.brillonline.com/entries/encyclopaedia-of-islam-2/salimiyya-SIM_6552?s.num=253&s.start=240) (2020年9月8日アクセス)

*Encyclopedia Islamica Online*. s.v. "al-Aṣḥab b. Nubāta." by Hasan Yusoḥi Ishkevari and Rahim Gholami. [https://referenceworks.brillonline.com/entries/encyclopaedia-islamica/al-asbagh-b-nubata-COM\\_0299?s.num=14](https://referenceworks.brillonline.com/entries/encyclopaedia-islamica/al-asbagh-b-nubata-COM_0299?s.num=14) (2020年9月8日アクセス)

*Mawsūah al-Ḥadīth*. s.v. "Īsā bin Yūnus bin 'Amur bin 'Abdullah." <https://hadith.islam-db.com/narrators/6343/%D8%B9%D9%90%D9%8A%D8%B3%D9%8E%D9%89%20%D8%A8%D9%92%D9%86%D9%8F%20%D9%8A%D9%8F%D9%88%D9%86%D9%8F%D8%B3%D9%8E> (2020年9月8日アクセス)

*WikiShia*. s.v. "Sahl b. Sa'd al-Sa'idi." [https://en.wikishia.net/view/Sahl\\_b.\\_Sa%27d\\_al-Sa%27idi](https://en.wikishia.net/view/Sahl_b._Sa%27d_al-Sa%27idi) (2020年9月8日アクセス)

———. s.v. "Nasibi." <https://en.wikishia.net/view/Nasibi> (2020年9月8日アクセス)

———. s.v. "Rafidi." <https://en.wikishia.net/view/Rafidi> (2020年9月8日アクセス)

〈日本語文献〉

飯山陽「マスラハ理論展開史におけるガザーリーの功績再考—『マンフル』『シファーウ』『ムスタファー』の比較より」『オリエント』50/2 (2007) : 141-160.

———. 「目的論的解釈への道—カラーフィーの法理論にみるマスラハ概念より」『オリエント』46/2 (2003) : 113-133.

石郷岡宏記「〈奇妙なもの〉と〈奇妙な者たち〉—イブン・タイミーヤ『ファトワー集成』より「奇妙な者たちに幸せあれ」ハディース注解論考の翻訳と解題」『同志社グローバル・スタディーズ』8 (2017) : 177-204.

———. 「〈奇妙なもの〉と〈奇妙な者たち〉—イブン・カイイム『求道者の階梯』「グルバ章」の翻訳および解題「付」アンサーリー・ハラウイー『旅路を行く者』「グルバ章」」『同志社グローバル・スタディーズ』10 (2019) : 191-225.

大塚和夫・小杉泰・小松久男・東長靖・羽田正・山内昌之(編)『岩波イスラーム辞典』岩波書店、2002年.

大淵久志「イスラーム世界の諸宗教と分派—ファフルッディーン・ラーズイー著『諸分派の信条』翻訳」『イスラーム世界』94/2 (2020) : 29-57.

奥田敦「書評：ワーエル・B・ハッラク著／黒田壽郎訳『イスラーム法理論の歴史—スンニー派法学入門』」『法制史研究』62 (2012) : 244-250.

———. 「(書評) 堀井聡江著「サイド・ブン・アッサマルカンディーの『司法の寄るべと争訟人の護り』—ハナフィー派の学説相伝にみるヒヤル (hiyal, s. hila) 研究の新視点」」『東洋学報』83/2 (2002) : 291-293.

押尾高志「16世紀におけるモリスコの集合的アイデンティティ：グラバーghurabā'概念をめぐって」『スペイン史研究』25 (2011) : 17-27.

ハッラク、ワーエル・B『イスラーム法理論の歴史—スンニー派法学入門』書肆心水、2011年.

中田考「イスラーム『復興』運動の理念—イブン・タイミーヤのハディース注釈を手がかりに—『イスラームは少数派として始まった』ハディース注釈の解説をかねて」『日本サウディアラビア協会報』137 (1988) : 4-11.

浜本一典「現代の「シャリーアの目的」論に見られるラシード・リーダーの影響—人権をめぐる議論を例にとりて—」『一神教世界』8 (2018) : 35-48.

———. 「「シャリーアの目的」論の変遷：信教の自由をめぐる」博士論文 (2017) 同志社大学.

———. 「シャリーア解釈における必要性の法理：その意義と問題点」『一神教世界』1 (2010) : 27-38

森伸生「イスラームの法と宗教 (2)」『拓殖大学イスラーム研究所ニューズレター』12-2 (2014) : 2-5.

Abstract

# Strangeness and Strangers: An Annotated Translation and Introduction to Shāṭibī's *I'tiṣām*

Koki Ishigohoka & Nozomi Tajima

This annotated translation of the Arabic judicial work *al-I'tiṣām* (holding fast), authored by the Mālikī jurist in fourteenth-century Andalus, Abū Ishāq al-Shāṭibī (d. 790/1388), aims to deepen the understanding of the concept of strangeness (*ghurbah*) and strangers (*ghurabā'*) in Islamic thought. To date, few studies have explored these notions, and most scholarship on Shāṭibī has focused on his best-known book, *al-Muwāfaqāt*, which explores the higher objectives of law (*maqāṣid al-sharī'ah*) and the public interest (*maṣlahah*) in Islamic law. However, *al-I'tiṣām* is one of his most important works, which provides an in-depth analysis of *bid'ah*. In this article, we translated the preface (*muqaddimah*) to Shāṭibī's *I'tiṣām* to shed new light on the historical aspect of “strangeness” and “strangers” in Islam. This is accompanied by an annotated introduction that examines his interpretations of “strangers” through a comparison with Ḥambalī jurist Ibn Taymiyyah (d. 728/1328) and Damascene Theologian Ibn Qayyim's (d. 751/1350) writings on the hadith “blessed are the strangers.” The article first provides background information on Shāṭibī and his *al-I'tiṣām*, with a specific focus on his conceptual linking of *ghurbah* and *bid'ah*. It then analyses Shāṭibī's perception of “strangers.” Subsequently, Ibn Taymiyyah's and Ibn Qayyim's perceptions of the hadith on “strangers” are discussed. Finally, a comparison between Shāṭibī's portrayals of these themes and those of Ibn Taymiyyah and Ibn Qayyim reveals the differences in how they perceive this concept.

**Keywords:**

Shāṭibī, *I'tiṣām*, *ghurbah*, *ghurabā'*, *bid'ah*, Ibn Taymiyyah, Ibn Qayyim